

第四章 夕顔の物語(2) 仲秋の物語

[第一段 源氏、夕顔の宿に忍び通う]

まことや(その頃、五条の女については)、かの惟光が預かりの(引き受けの)かいま見は(偵察は)、いとよく案内見とりて(あないみとりて、事情を調べて)申す(話すところに、)。

「その人とは(あの家の女主人については)、さらに(未だ)え(一向に)思ひえはべらず(判明しません)。人に(世間から)いみじく(極端に)隠れ忍ぶる気色になむ(隠れて奥まって暮らしているように)見えはべるを(見えますが)、つれづれなるままに(時には)、南の(南側の五条大路に面した)半蔀(はじと)ある長屋(ながや、仕切り間)に渡り来つつ(わたりきつつ、移って来ては)、車の音すれば、若き者どもの(若い侍女たちが)覗きなどすべかめるに(通りを隙間見たりするようですが)、この主(しゅう、女主人)とおぼしきも(と思われる人も)、はひわたる時(移って来る時)がはべかめる(あるようです)。容貌なむ(見た目は)、ほのかなれど(遠目でしたが)、いとらうたげにはべる(とても美人のようでした)。

一日(ひとひ、先日)、前駆追ひて(さきおいて、先立ちが前を払いながら)渡る(五条大路を通る)車のはべりしを(牛車があったので)、覗きて、童女(わらはめ)の急ぎて(覗き見た女童が急いで)、『*右近の君こそ、まづ物見たまへ(右近さんたら、ねえ見てよ)。*中将殿こそ、これより渡りたまひぬれ(中将殿がさ、今からお通りだよ)』と言へば、また(今度は)、よろしき大人(ちゃんとした女房が)出で来て、『あなかま(ああ喧しい=煩いよ)』と、手搔く(てかく、手を払って女童を制した)ものから(ものの)、『いかでさは知るぞ(どうしてそれがわかったの)、いで(どれ)、見む(見てみよう)』とて、はひ渡る(長屋へ渡ります)。打橋だつ(うちはしだつ、渡し板のような)ものを道にてなむ(道にして)通ひはべる(通るのです)。急ぎ来るものは(急いで来るものだから)、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて(よろよろ倒れて)、橋よりも落ちぬべければ(橋から落ちそうになって)、『いで(おや)、この*葛城の神こそ(こそ、と来たら)、さがしう(陰しゅう、危ない)しおきたれ(仕置きたれ、作りだね)』と、むつかりて(腹を立てて)、物覗きの心も(こころも、興味も)冷めぬめりき(冷めてしまったようでした)。 *「右近の君」は女房の呼び名。 *「中将殿」は女童が通りを覗き見て、目にした牛車から其れと知った頭中将。 *「葛城の神(かづらきのかみ)」は昔話で橋を掛け損なった粗忽な神。

(それでも其の女房が一行を見て)『君は(頭の君は)、御直衣(おんなほし、括り袴の普段着)姿にて、御隨身どももありし(護衛官付きだった)。なにがし(あれは誰々)、くれがし(これは誰々)』と数へしは(数えたのは)、頭中将の隨身、その小舎人童(こどねりわらは、蔵人見習い)をなむ(などを)、*しるしに(既に見知っていて)言ひはべりし(言っていたという事です)』など聞こゆれば(などとあって、其の報告を聞かれた源氏は)、 *遂に「しるし」が明かされた。遂にというのは、かつて夏の夕方に源氏一行が此処の家の夕顔の花を見ていた時に、家の女が源氏を誰かと「しるく」間違えて歌を贈ったが、是こそが彼の「誰か」の「しるし」である。その「誰か」は「頭中将」であり、女は頭中将から「常夏」と呼ばれた愛人である、らしい。ならば其の「常夏」の立場で彼の歌の本意を確かめよう。女の贈歌は「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花(和歌 4-1)」とあって、彼の時点では是を源氏の立場で「如何思っ頂いても構いま

せん、見て頂けるだけで光栄です」という挨拶だろうと思っていた。しかし隠れ棲む女が見ず知らずの男に気軽に挨拶などする筈は無い。源氏を頭中将と勘違いしたから、もしやと期待して歌を贈った。歌の字面は「心当たりが在る筈の白露を助けたい夕顔の私」と読めるが、「白露」は女が以前に秋露深い庭の〈撫子〉を頭中将との間に出来た〈女の子〉に見立てたので、頭中将なら「心当たりが在る筈の」〈撫子〉の事を示している。従って彼の歌は、子を思う母の心が歌の本意であり、もし貴方が頭の君なら〈撫子〉を心に掛けて下さい、と訴えたものだった。ところで、この事をなぜ此処で作者は持ち出したのか。それは、この事情を察した源氏がこの後取る行動から其の本性を浮かび上がらせようと、作者が意図したからに違いない。焦点は此処に続く源氏の動きだ。

「たしかに(しっかりと)その車をぞ(その車の事のほうこそを)見まし(確認したいものだ)」

とのたまひて、「もし(もしや五条の女は)、かの(あの頭中将が)あはれに忘れざりし人にや(不憫に思って忘れられずに居る人だろうか)」と、思ほしよるも(お思い寄るにも)、いと知らまほしげなる御気色を見て(とても知りたそうだったが、その源氏の様子を見て、惟光は)、

「私の(わたくし事の)懸想(けさう、恋路)も(のほうも)いとよくしおきて(上首尾で)、案内も残るところなく(私は夕顔の家には女主人がいるという事情は限なく)見たまへおきながら(承知の上ですが)、ただ(私が情交している相手は)、我れどちと知らせて(私に夕顔の家は侍女同士暮らしなのだと言う)、物など言ふ(口ぶりの)若きおもとの(はべるを(若い侍女なので)、そらおぼれ(騙された振りを)してなむ(しながら)、隠れまかり歩く(忍んで出向いています)。いとよく隠したりと思ひて(相手は上手く隠した心算で)、小さき子どもなどの侍るが言誤り(ことあやまり、口を滑らせる)しつべきも(事があっても)、言ひ紛らはして、また人なきさまを(特には女主人などの居ないように)強ひてつくりはべる(無理に言い繕っています)」など、語りて笑ふ。

「尼君の訪ひに(とぶらひ、お見舞いに)ものせむついでに(行った序でに)、かいま見せさせよ(私にも覗かさせて呉れ)」とのたまひけり(と源氏が仰せられた)。

かりにても(仮住まいだとしても)、宿れる住ひの(あの家の)ほどを思ふに(上流らしからぬ程度を思うと)、「これこそ、かの人(の)定め(あの雨夜の品定めで)、あなづりし(頭中将が相手にしないと蔑んだ)下の品ならめ(下の品に違いない)。その中に、思ひの外に痴しき(をかしき、見事な)こともあらば(事でも有れば楽しい)」など、思すなりけり(源氏はお思いになっていた)。

惟光、いささかのことも御心に(おんこころに、源氏の意向に)違はじと思ふに(違わぬ様にと)思い、また、おのれも隈なき好き心にて(自分も見境いの無い好色ということもあって)、いみじく(巧妙に)たばかり(策を弄して)まどひ歩きつつ(夕顔の家に通う内に、迷った振りで細かな内情や家の間取りなどを調べ上げて)、しひて(夜這いの無理通いのような体裁で)おはしまさせ(源氏を其の家にお通わせ)初めてけり(そめてけり、始めた)。このほどのこと(この辺の事情は)、くぐくぐしければ(口説くなるので)、例のもらしつ(良く在る様に漏れ零す=以下省略)。

女(源氏は女を)、さしてその人と(あえて誰とは)尋ね出でたまはねば(お尋ねにならず)、我も名のりをしたまはで(自身も名乗らずに)、いと(また)わりなく(無闇に)やつれ(粗末な)たまひつつ(形をして)、例ならず(いつになく、身分を隠す為に)下り立ち(車から降り立って)歩き給ふは(ありきたまふは、歩いて通われるのは)、おろかに(この女との事を源氏が粗略に)思されぬ(思

われていない)なるべし(ならではの事)、と見れば(と惟光は見て)、我が馬をばたてまつりて(自分の駄馬に源氏をお乗せして)、御供に走りありく(自分はお供に付き走った)。

「懸想人の(けさうびとの、侍女にとっては惟光自身が優男なので)いと(まるで)ものげなき(駄馬に従う下っ端と)足もとを(自分の姿を)、見つけられて(女に見られて)はべらむ時(低い身分だと思われるのは)、からくも(情けない)あるべきかな(思いをする)」とわぶれど(と惟光は愚痴だったが)、人に知らせたまはぬままに(源氏は秘匿を旨として)、*かの夕顔の導べせし(しるべせし、説明をした)隨身ばかり(護衛官の只一人)、さては(それと)、顔むげに知るまじき(誰とも顔を知られていない)童一人ばかりぞ(小姓の一人だけを)、率ておはしける(連れただけだった)。「もし思ひよる気色もや(何処で気づかれるか知れない)」とて、隣に(隣の惟光の母なる尼君の家に)中宿をだに(立ち寄ることも)したまはず(為されなかった)。*注釈に、秘匿を旨とする通いの供人に、顔を知られているはずの隨身を従えるのは不自然、とある。確かに相手に自分の身分を隠そうとする意味では、この指摘は尤もだ。ただ其れなら通いの話を女に通した惟光が供に居る事の方が諸暴露である。此処での秘匿の意味は、飽くまで内向きに既に事情を知るもの以外は供にも付けない、という事だろう。だが相手を欺く事に付いても確かに気に掛かる。

女も(女のほうでも源氏の素性が)、いと(まるで)あやしく(分からず)心得ぬ心地のみして(不安があったので)、御使に人を添へ(源氏の文遣いの後を付けさせたり)、暁の道をうかがはせ(朝帰りを尾行させたりして)、御在処(おんありか、源氏の家を)見せむと尋ぬれど(見定めようと探したが、源氏のほうは)、そこはことなく(それをどうにか)まどはしつつ(誤魔化しながら)、さすがに(それでも)、あはれに(心惹かれて)見では(逢わずには)得(え、とても)あるまじく(居られずに)、この人の(この女が)御心にかかりたれば、便なく(不都合な身分違いで)軽々しき(かるがるしき、軽率な)ことと、思ほし返し(思い返せば)わびつつ(躊躇いながらも)、いと(かなり)しばしば(頻繁に)おはします(出向かれた)。

*かかる筋は(色恋では)、まめ人の(堅い人が)乱るる(節度を外す)折もあるを(時もあるが、源氏にしても今までは)、いとめやすく(とても品よく)しづめたまひて(穏やかに)、人のとがめ聞こゆべき(人から非難されるような)振る舞ひはしたまはざりつるを(行いは為されて来なかったが)、あやしきまで(いつになく)、今朝のほど(朝に別れて)、昼間の隔ても(昼間は会えずにいる時にも)、おぼつかなくなど(逢いたい一心で)、思ひわづらはれたまへば(何も手につかず)、かつは、いともの狂ほしく、さまで(そこまで)心とどむべきことの(気を取られる)さまにもあらずと(事でもないだろうと)、いみじく(つとめて)思ひ冷ましたまふに(冷静でいようとするが)、人のけはひ(女の印象が)、いと(それは)あさましく(意外なまでに)やはらかに(ゆったりと)おほどきて(大様で)、もの深く重き方はおくれて(深刻ぶる所が無く)、ひたぶるに(一向におよそ)若びたる(子供っぽい)ものから(ものの)、世を(性戯に)まだ知らぬにもあらず(疎い訳でもなかった)。いと(然程)やむごとなきには(高い身分では)あるまじ(無いだろうに)、いづくに(何処に)いと(また)かうしも(此れ程にも)とまる心ぞ(心惹かれるのか)、と返す返す(いくら考えても不思議に)思す(おぼす、お思いになる)。*此処の文を鵜呑みに出来る人が居るのだろうか。私は戸惑った。基本的に私の読み方は、一段落毎に原文と対訳を見比べて、大概が理解できたら自分なりに読みやすく漢字を振ったり辞書で言葉を確認したりしながら話を追って行く。対訳との見比べて疑問が出ると面倒で楽しい作業へ突入する。言葉の一つづつ辞書や参考書や参照サイトで確認しながら疑問を解いて行くワケだ。マ、当たり前だが。この段も

意味が良く分からなかったので、一語ずつ注意して辞書を引いた。しかし結果は、ほぼ対訳と変わらない。要するに対訳が分からないのではなくて、文自体の言っている事が腑に落ちない、という奇妙な事態に陥った。源氏は悪事を働いているとは言わないが決して律儀でもない。それが此処の文では、今回だけ本気で恋に悩んでいる、みたいな言い方だし、その理由も是と言って返す返す考えても当人は分からない、らしい。作者は何を言っているのか。それが何と、私自身の端書を見直してやっと分かった。源氏はこの女を頭中将の愛人だった「常夏」だろうと察している。しかし、敢えて其れを確かめようとしない。何故か。それは女が遣した歌の本意を母心と知ってしまったからだ。源氏が女を「常夏」だと確認してしまったら、源氏はこの女の事を頭中将に知らせて、「撫子」の面倒を見るように仕向けなければならない。友人として義弟として当然である。だから源氏は確認を故意に避けた。そして「常夏」を女の子の母としてではなく、女として見て自ら関わりたかった。そして、此処が肝心なのだろうが、この微妙な関係の危うさが源氏は好きで好きで堪らない、という厄介な性分を持ち合わせていた、という事を此処で作者は本人の胸中描写を以って言わんとしている、に違いない。だからこそ源氏は常軌を逸してまで、身内への秘匿と相手への欺きに心血を注いだ、のである。そう考えて、初めて以下の文が良く分かる。

*いと(ずいぶんと)ことさらめきて(わざとらしく)、御装束をも(おんさうぞくをも、服装まで)やつれたる(粗末な)狩の御衣(かりのおんぞ、狩衣袴)をたてまつり(お召しになり)、さまを変へ(変装して)、顔をも(顔さえ)ほの見せたまはず(少しもお見せにならず)、夜深きほどに(夜更けた暗がり)、人をしづめて(人を制して)出で入りなどしたまへば(単身で出入り為されたので)、*昔ありけむ(昔話にある神の夜這いの)ものの変化めきて(蛇の化身のようで)、うたて思ひ(女は気味悪く思い)嘆かるれど(嘆いたが)、人の御けはひ(源氏の人となりは)、はた(さすがに)、手さぐりもしるべきわざなりければ(手探りからでも窺われたので)、「誰ればかりにかはあらむ(拒んで逃げる程ではないが、どれ位の方なのだろうか)。なほ(やはり)この(此の頃に侍女に手出ししている隣家の)好き者のし出でつる(仕組んだ)わざなめり(事なのだろう)」と、*大夫を(惟光を)疑ひながら(疑って、女は侍女を通して惟光にそれらしい事を聞いてくるが)、せめて(惟光はせいぜい)つれなく(はぐらかして)知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまに(まるで心当たりが無いように)、たゆまず(ずっと)あざれありけば(嘘を吐き通したので)、いかなることにかと心得がたく、女方もあやしう(半信半疑の)やう違ひたる(風変わりな)もの思ひをなむ(をなむ、といったところを)しける(していた)。 *此処の描写は一読した時に、少々馬鹿げた表現に感じられた。何か現実味が薄い印象だった。しかし、惟光が女房の手引きを算段したのではない、と言う記述が直後にわざわざ語られている。現実味の薄い描写は他にもあったが、其の都度そうだったのだと観念させられてきた。そりゃそうだ。作者は為時女で、此方は読者なのだから。だから源氏は、本当に妙な格好をして、本当に夜中に一人切りで女の寝所に出入りした、のだ。惟光は夜這いの手引きを仕組んだのではなく、女の寝所の場所や間取りや近くの様子を丹念に調べて、物理的に夜這いを可能為らしめるように、源氏に報告したという事に成る。だから女は夜這う源氏に本当に脅えた。其れを源氏の高貴さが何とか事を納めた。そういう事だ。 *当時の京で知られていた之の類の「昔話」とは、「三輪山神婚説話みわやましんこんせつわ」をいうらしい。「三輪山神婚説話」は天皇家の姫宮が三輪山の大神と契り、夜這いでは顔が分からないと昼に逢ったら、大神が蛇だったので姫が驚くと、神は怒って三輪山に戻り、姫は腰を抜かして座り込んだ時に箸で陰部を突き刺して亡くなった、という神話。三輪山は三輪素麺で有名な奈良県桜井市にある山で、標高 467m 周囲 16km 程だが古来より斧を入れない全山神社とのこと。 *「大夫たいふ」は五位の者をいう。五位は位階の 5 番目で殿上では最下位。惟光の身分である。

[第二段 八月十五夜の逢瀬]

君も(源氏も五条の女が)、「かく(このように)うらなく(無邪気に)たゆめて(油断させて)はひ隠れなば(ふと身を隠してしまったら)、何処を計りとか(いづこをはかりとか、何処を目当てにして)、我も尋ねむ(探したのか、自分にも分からない)。かりそめの隠れ処と(一時凌ぎの隠れ住まいと)、はた(まず)見ゆめれば(思われるので)、いづ方にもいづ方にも(何処へ如何とも)、移ろひゆかむ日(移って行く日が)、いつとも知らじ(何時なのか分からない)」と思すに、追ひまどはして(跡を見失って)、なのめに(普通の事と)思ひなしつ(思い済ませる)べくは(のであれば)、ただかばかりの(ただこのような)すさびにても(成り行きの遊び事に)過ぎぬべきことを(終えてしまえるものを)、さらに(到底)さて過ぐしてむと(それで済まされるとは)思されず(お思いに為ら無かった)。

人目を思して(人目を憚り)、隔ておきたまふ(間を取ろうと通いを控えた)夜な夜ななどは、いと忍びがたく、苦しきまでおぼえたまへば、「なほ(もう)誰れとなくて(誰を如何という正規の手続きを省いて、この女を妻として)二条院に迎へてむ(二条院に迎えてしまおう)。もし聞こえありて(もし世間に知れて)便なかるべきこと(左大臣家との仲が抉れて)なりとも(しまっても)、さるべきにこそは(致し方ない)。我が心ながら、いとかく(これほどまでに)人に染む(ひとにしむ、一人の人を思い詰める)ことはなきを、いかなる契り(ちぎり、宿縁が)にかは(前世に)ありけむ(あったのだろうか)」など思ほしよる(など思い廻らしに為られた。そこで源氏は五条の女に、)。

「いざ(それでは)、いと(もう)心安き所にて(私の家に行つて)、のどかに聞こえむ(偽りを解いて話しましょう)」など、語らひたまへば(などと、お誘いになると女は)、

「なほ、あやしう(いえ、変です)。かくのたまへど(そう仰いますが)、世づかぬ(得体の知れぬ)御もてなしなれば(お誘いなので)、もの恐ろしくこそあれ(何か恐ろしい気がします)」

と、いと(ほんの)若びて言へば(子供っぽい軽口で応えたので)、「げに(なるほど)」と、ほほ笑まれたまひて(と、源氏は微笑まれて)、

「げに(本当に)、いづれか(どっちが)狐なるらむな(狐なんでしょうね)。ただ(でも、それならそれでは)はかられ(騙されて)たまへかし(御覧なさいな)」

と、なつかしげに(懇ろに)のたまへば(おっしゃると)、女もいみじくなびきて(女もすっかりその気になって)、さもありぬべく(それもいかと)思ひたり(思っていた。其の女の様子を源氏は、)。「世になく(得体も知れず)、かたはなる(具合が悪くなる)ことなりとも(可も知れないのに)、ひたぶるに(一途に)従ふ心は(従順な心は)、いと(本当に)あはれげなる人(可愛らしい人)」と見たまふに(とお思いに為ったが)、なほ(やはり此の女は)、かの頭中将の常夏(なのではないかと)疑はしく、語りし(其の話を語った頭中将の)心ざま(女への未練を)、まづ思ひ出でられたまへど(真っ先に思い出されたが、身を隠した女にも事情が在ったのだろうともお考えに為って)、「忍ぶるやうこそは(話したがないだろう)」と、*あながちにも(無理には女に)問ひ出でたまはず(聞き出そうとは為されなかった)。*この語り口は些か偽善的である。源氏が常夏の母性を、とても然うは思えないが、万歩譲って仮に潜在意識下だったとしても、敢えて無視した事は明らかなだ。いや、無視しても視

界から消えないという事は在るだろう。だとしたら、女が源氏に「忍ぶる一打ち明けない」かどうかではなく、源氏が頭中將に「忍ぶる」かどうか、を問題にすべきだろう。やっぱり源氏は超人か。

(女は話の最中に)気色ばみて(顔色を変えて怒り出しては)、ふと背き(不意に心変わりを起こして)隠るべき(身を隠してしまうような)心ざまなどはなければ(性格ではない、と源氏はお思いだったので)、「かれがれに(夜離れて)とだえ置かむ(久しく通わぬ)折こそは(時こそが)、さやうに思ひ変ることもあらめ(心変わりの時なのだろうと)、心ながらも(思いながらも)、すこし移ろふことあらむこそ(いくらか夜離れの不安含みのほうが)あはれなるべけれ(この女は味わい深い)」とさへ、思しけり(とさえお考えに為った)。

八月十五夜(はづきのとをかあまりいつかのよ)、隈なき月影、隙多かる板屋(ひまおほかるいたや、隙間だらけの板屋根から)、残りなく漏りて来て(月光がすっかり部屋に差し込んで、部屋の様子が見えやすくなった)、見慣らひたまはぬ(今まで見過ごしていた)住まひのさまも珍しきに(部屋の中をあちこち見回すうちに)、暁近くなりける(夜明け近くになった。)なるべし(其の頃)、隣の家々、あやしき賤の男(しづのを、貧者)の声々、目覚まして、

「あはれ(何だか今朝は)、いと寒しや(ずいぶん寒いな)」

「今年こそ(今年だと)、なりはひにも(商売の)頼むところすくなく(当ても少なく)、田舎の通ひも(地方廻りも)思ひかけねば(見込めない)、いと心細けれ(ほんとに心細い)。北殿こそ(きたどの)こそ、北のお隣さん)、聞きたまふや(聞いて呉れるか)」

など、言ひ交はすも聞こゆ(言い交わすのが聞こえる)。いと(ごく)あはれなる(慎ましい)おのがじしの(各自の)営みに(生計立てに)起き出でて、そそめき騒ぐも(準備に勤しむ下賤の者どもが立てる物音が)ほどなきを(ごく近くに聞こえるのを)、女いと恥づかしく(女はとても極まり悪そうに)思ひたり(思っていた)。

艶だち(えんだち、風流めいた)気色ばまむ人は(気取り屋などは)、消えも入りぬべき(消え入りそうな)住まひのさまなめりかし(暮らしぶりだった)。されど(この女は)、のどかに、つらきも憂きも傍痛き事も(かたはらいたきことも、見てくれの悪いことも)、思ひ入れたるさまならで(苦しむ様子も無しに)、我がもてなしありさまは(自らの身のこなしは)、いと(とても)あてはかに(上品で)こめかしくて(厭味が無く)、またなく(例え様も無く)らうがはしき(騒がしい)隣の用意なさを(隣家のぶしつけさを)、いかなる事とも聞き知りたるさまならねば(其れが何の音と分かる様子では無かったので)、なかなか(かえって)、恥ぢかかやかむ(恥じて縮込んでしまう)よりは、罪許されてぞ見えける(罪が無い様に見えた)。

ごほごほと鳴る神(なるかみ、雷)よりも怖どろ怖どろしく(おどろおどろしく、物凄く)、踏み轟かす(下女が柄を踏み突く)唐臼(からうす、精米石臼)の音も枕上(まくらがみ、枕元)とおぼゆる(で鳴っている様に聞こえる)。「あな、耳かしかまし(ああ、耳が煩い)」と、これにぞ思さる(これには源氏も閉口なされた。が、)。何の響きとも聞き入れたまはず(何の音かはお分かりにならず)、いと(全く)あやしう(不快な)めざましき(落ち着かぬ)音なひ(おとなひ、響き)とのみ聞きたまふ(お聞きになる)。くだくだしきことのみ多かり(雑多な事ばかりだった)。

白妙の衣(しろたへのころも、白麻布)うつ砧(きぬた、衣を木槌で打って繊維をほぐす衣板や石台)の音も、かすかにこなたかなた聞きわたされ(響き渡り)、空飛ぶ雁の声、取り集めて、忍びがたきこと多かり(染み染みとした秋の風情もあった)。端近き(はしちかき、庭に面した)御座所(おましどころ、部屋)なりければ(だったの)、遣戸(やりど、引き戸)を引き開けて、もろともに(源氏は女と一緒に)見出だしたまふ(外を御覧になられる)。ほどなき庭に(小さな庭に)、されたる呉竹(設えた呉竹)、前裁の露は(草露は)、なほかかる所も(このような所でさえも)同じごと(立派な前裁の物と同じように)きらめきたり(光っていた)。虫の声々乱りがはしく(騒々しく)、壁のなかの(秋になって室内に来て)蟋蟀(きりぎりす、近寄ったコオロギの声)だに(でさえ)間遠に(まどほに、間を置いて)聞き慣らひたまへる御耳に(聞く事があつたくらい虫に縁遠い源氏の耳に)、さし当てたるやうに鳴き乱るるを(直に当てた様に鳴き乱れる虫の声を)、なかなか(是は之で)さまかへて(別の風情と)思さるるも(お思いになるのも)、御心ざし一つの浅からぬに(女に入れ揚げてこそ)、よろづの罪許さるるなめりかし(大様さと言った所だろうか)。

白き袷(あはせ)、薄色の(うすいろ、薄紫色の)なよよかなる(柔らかな単衣)を重ねて、はなやかならぬ姿、いと(とても)らうたげに(労しく)あえかなる心地して(果敢なげで)、そこと(何処と言って)取り立ててすぐれたることもなけれど、細やかに(ほそやかに、小柄で)たをたをとして(物腰柔かく)、ものうち言ひたるけはひ(何か言い漏らす時などの可憐さに)、「あな、心苦し(あ、堪らない)」と(と源氏は)、ただいと(ただもう)らうたく見ゆ(女を抱きしめたくなるばかりだった)。心ばみたる方(これに思慮深さ)をすこし添へたらば、と見たまひながら(などと考えながら女を見て御出での源氏だったが)、なほ(もっと)うちとけて見まほしく(深く知りたいと)思さるれば(思われて)、

「いざ(それでは)、ただ(少し)このわたり近き所に(近くにもある私の家の一つまで出かけて行って)、心安くて(親しく寛いで)明かさむ(身分を明かししょう)。かくてのみは(こうして偽ったままでは)、いと(もう)苦しかりけり(苦しくて為りません)」とのたまへば、

「いかでか(どうしてまた)。にはかならむ(そんな急な)」

と、いと(まるで)おいらかに(落ち着いて)言ひてあたり(答えて動かない)。この世(浮世遊び)のみならぬ(以上の)契りなどまで(約束さえも)頼めたまふに(源氏が持ち掛け為されたというのに)、うちとくる(身構えもしない)心ばへなど(女の性格のようなものが)、あやしく(奇妙な)やう変はりて(趣を帯びて)、世馴れたる人ともおぼえねば(世事に疎い女とさえ思われて)、人の思はむ所もえ憚りたまはで(源氏は人目も憚らず)、右近を召し出でて(側居する夕顔付き侍女の右近に命じて)、隨身を召させたまひて(隨身を呼び寄せさせて)、御車引き入れさせたまふ(御車を邸内に引き入れ為させられた)。このある(此の家の)人びとも(女房たちも)、かかる御心ざしの疎か為らぬ(おろかならぬ、重々しき)を見知れば、おぼめかしながら(漠然と思うばかりながら)、頼みかけきこえたり(源氏の手厚い御世話を期待申し上げた)。

明け方も近うなりにけり(この慌しい出立に、時は既に明け方近くになっていた)。鶏の声などは聞こえで(聞こえず)、*御嶽精進(みたけさうじ)にやあらむ(なのだろうか)、ただ(隣家の)翁びたる(おきなびたる、老人のような)声に(声で)額づくぞ(ぬかづくぞ、礼拝しているのが)聞こ

ゆる。起ち居(たちみ、立ち座り)のけはひ(の所作も)、堪へがたげに(難儀そうに)行ふ(勤めて
いる)。*「御嶽」は奈良県吉野山の金峯山寺(きんぷせんじ)の修行連峰をいう。金峰山を「金の御嶽」と見立てて、
其の参拝を「王の参拝」として、平安貴族が習慣としたらしい。「御嶽精進」は其の参拝に先立って行う礼拝。

(源氏は其の翁の礼拝に)いと(たいそう)あはれに(感じ入って)、「朝の露に異ならぬ(ことなら
ぬ、同じように果敢ない)世を(人の世を)、何を貧る(むさぼる、欲張って)身の(現世利益を)祈
りにか(祈るのだろうか)」と、聞きたまふ(お聞きになっていた。すると翁は)。「*南無当来導師(な
むたうらいだうし)」とぞ拝むなる。*「南無当来導師」の「導師」は「弥勒菩薩(みろくぼさつ)」のこと。「弥勒
菩薩」は現世の全救済に現れる聖人。「当来」は「今来臨を乞う」で、「南無」は「縫り服す」なので、唱文としては「聖人
の直訓によって仏道を成就したい」となる、とのこと。

「かれ(あれを)、聞きたまへ(お聞き為され)。この世とのみは(現世利益だけを)思はざりけり
(祈っていた訳でも無さそうだ)」と(と源氏は夕顔に話しかけられて、さらにまた)、あはれがり
(感慨深げに)たまひて(為されて、こう詠んだ。)、

「*優婆塞が行ふ道をしるべにて、来む世も深き契り違ふな」(和歌 4-5)

「修行の道の陰しさよりも、夜の契りの情けの深さ」(意訳 4-5)

*「優婆塞(うばそく)」は男の在家仏門信者で隣家の翁。弥勒菩薩の当来を願って遠い未来の幸を祈る「信者の念行を
訓えとして、来世での深い縁を約束しよう」と源氏は女に歌い掛けた。「来む世」は死後の世界で、仏心の導きで来世
での契りまで誓うという恋歌の体裁だが、「こむよ」は「今ん夜」に掛けるので自らを「優婆塞」に重ねれば、内実は「私
の猛りを受け止めて、今夜も深く契りを交そう」という直截的な艶歌となっている。此处で自らを重ねることで、先
に翁の現世利益を蔑んだことが、自虐性を持って生きてくる。実際、此处の場面での源氏のはしゃぎ振りとな者との
対比は、行く末に浮き足立つ怖さを十分に感じさせる。これは深読みではなく、この歌の為に彼の翁を登場させ
たと見るほうが自然だろう。上手な演出なので、出来上がってから見ると必須の情景描写のようにも見えるが、翁
の登場に物語上の必然性は無い。

*長生殿の古き例(ためし)は由々しくて(ゆゆしくて、不吉なので、<深き契り>を詠み込む時に)、
*翼を交さむとは引きかへて(ひきかえて、例に引かずに)、*弥勒の世を兼ね賜ふ(かねたまふ、
例に引いて詠み歌に掛け合わせ為された)。行く先の御頼め(来世の約束とはいえ、弥勒の世とは)、
いと(余りにも)言痛し(こちたし、大袈裟に過ぎる。そこで夕顔はこう返歌した)。*「長生殿(ち
やうせいでん)」は中国唐代の宮殿で、玄宗皇帝が楊貴妃を伴って旅した場所。二人の悲恋物語である白楽天の長恨
歌(ちやうごんか)によると、二人は長生殿で愛を誓ったが、其の詞に、合体して「一羽の鳥になる」、とか、合体し
て一本の枝になる、という願いが詠われていた。*「翼を交さむ(はねをかはさむ)」が其の、二人で「一羽の鳥にな
る」、という歌の中の文句である。しかし楊貴妃はその後、国を滅ぼすとして謀殺されたので、<愛の門出>を之の悲
恋に準るのは不吉というワケだ。折角の<愛の門出>を坊主に頼るのも無粋だが、不吉よりはマシと言った所か。*
頼られた其の弥勒菩薩は、釈迦入滅後、五十六億七千万年後に出現するという。「弥勒の世を兼ね賜ふ」とは、その
出現までの永い約束をする、ということになるらしい。

「前の世の契り知らるる身の憂さに、行く末かねて頼みがたさよ」(和歌 4-6-1)

*贈歌の「来む世(こむよ)」に対して、「前の世(さきのよ)」と継いで返歌としてある。ところが、問題の「契り」を知るのは「身の憂さ」らしい。この歌の前節は「身の憂さ」を<不運>と意味付けて、「現世の不運から前世の悪い契りを思い知れば」とあり、さらに後節では「来世の契りを望んでも当てにならない」と締めて、全体で絶望的な歌となっている。だが、<現世の不運>は贈歌にも詠まれていないし、此処までの物語に夕顔の不運について特段の描写も為されていないので、是では返歌としては意味不明。これを仮に頭中将との破綻を示唆して、悲しい情緒を詠んだものだとし、其れを<不運>と今の恋人に言うのは重過ぎるし、この場で悲しい情緒を演出する意図自体が理解できない。夕顔の無頓着な性格を演出するために、作者はこの乱暴な歌を夕顔に詠ませてしまったのだろうが、それにしても全体の情緒が難解である。そこで曲解を試みる。上の解釈は裏の意、または複線で、本意は次の様ではないのか。

「前の夜の契り知らるる身の憂さに、行く据え兼ねて頼みがたさよ」(和歌 4-6-2)

*ここでの「身の憂さ」は<不運>ではなく<不安>である。この夜の急展開を思えば、この気持ちは納得しやすい。この前節は、「今の不安な気持ちで夜の激しい情交を思い返すと」、ということになる。そして後節は、来世の<逝く>ではなく、目先の<行く>なので、「この激しさは先の収まりが悪そうで頼りない」、ということになる。従って全体で見ても、今も不安で先も不安と、不安で一杯な様子なのだが、刹那の近視なので深刻ではなく、だから宜しく願います、くらいの余韻を残す。夕顔の描写と一致する。同じ無頓着でも此方は可愛げがある。どちらが表裏でも無頓着な歌に此処まで手の込んだ仕掛けを労するものか、とも見えるが、恐らく是は作者のストック・チョイスだろう。藤原為時女は歌人なのだから、この物語を綴る以前に、多くの歌を作り、多くの詩作を重ね、多くの人々を観察し、多くの資料を収集していた、に違いない。さらに紫工房には、膨大な自作他作の集葉在庫保管は在ったはずだ。そもそもが、源氏も夕顔も隨身でさえも、登場人物一人一人の全ての其の人と形りの想定に、実在の人物が投影されていなければ、このような込み入った長編を綴ることは不可能ではないのか。また、それだからこそ今日でも、情景の描写も含めて、其の資料的価値を認めて、この物語を面白く読めるのだろうし、少なくとも私は其の心算で味わっている。実話の事件性より、社会総体を眺めて事象の蓋然性を探り、人間の実像に迫りたい。そして世間が分かった心算で少しでも豊かな気分で暮らしたい、という欲求を満たそうと画策している。とまあ、尤もらしい講釈を垂れるのも楽しみの内。楽しみ序でに図に載って此処の場面を下世話風に言えば、場末のスナックのママが妙に琴線に触れた、みたいな。

「お経なんか頼るより、あなたの腕に縋りたい」(意識 4-6)

かやうの(こうした)筋なども(事の運びも)、さるは(この返歌の様子からすると)、心もとなかめり(*女は不安だったようです)。*今さっき下世話風にと断って、夕顔を場末のスナックのママに準らえたが、之は夕顔に其の要素が窺えるといった意味で、言うまでもないが、夕顔の人となり把握するには是では乱暴に過ぎる。それに下世話風にと断つと言うのは、私が場末のスナックには行けるが、王朝世界には入れないという事情に依るだけで、両者に対して失礼なのかもしれない。で、この際だから、夕顔の人物像を少し整理してみよう。夕顔は今でこそ場末近くに身を窶しているが、頭中将と知り合った時の様子では良家の娘だった。殿上の家柄でなければ撰関家の子弟に紹介されもしまい。ただ、没落したか少なくとも衰退した家ではあったらしい。まるで源氏の生母の桐壺のようだ。勿論、桐壺はそれでも入内して、夕顔は撰関家の子弟の妾だったのだから、地位の差は歴然としているが、両者の実家は似たような事情だとは言えた。桐壺は不幸に吞まれて没したが、夕顔の印象は幾分違う。頭中将の話では、夕顔は右大臣家から脅迫されて在家から逃げ出して、身を隠したらしい。しかも夕顔は其の脅迫を頭中将に訴える事もせず、頭中将に振られたと一人合点して、下流へ流された、ように見える。そう、夕顔は自ら進んで流れたというより、子育て等の理由で目先の世話にすがって五条へ流されて来たのだろう。

夕顔は自己主張しない女である。当たり前だが、自己が無いのではない。其れを主張するという生活態度を身に付けていない。控えめに身を処すだけで、是と言って困る事が無く暮らせる程の、そこそこ恵まれた良家では良く見受けられる類の人である。それで済むなら一番楽な生き方だし、其の大様さは万人受けもするので、その温和な存在を重宝がられさえもしたりする。自己主張が主観に過ぎないとすれば、無主張は自己客観性の最大表現となる。沈黙は金である。長女ほど才立たず、末女ほど奔放でもない、次女性格である。其処に教養と美貌が加われば、魅力的な姿は思い描きやすい。其処に更に、幾分翳りが添えられては源氏ならずと溺れてみたくなる男がいても無理は無い、といったところか。

[第三段 なにがしの院に移る]

いさよふ月に(消え残る月に)、ゆくりなく(思いがけず)あくがれむ(家を離れる)ことを、女は思ひ休らひ(おもひやすらひ、ためらい)、とかくのたまふほど(源氏があれこれ取り成している内に)、俄かに(にはかに、急に)雲隠れて、明け行く空いと(とても)をかし(美しい)。はしたなきほどに(人目に晒すように)ならぬ先にと(なる前にと)、例の急ぎ出でたまひて(いつものように急がせて車を御出しに為って、源氏は夕顔を)、軽らかに(かろらかに、素早く)うち乗せたまへれば(前列同席に乗り込ませなさんと)、右近ぞ乗りぬる(侍女の右近が後列に乗り込んだ)。

そのわたり近き(その五条近くの)なにがしの院に(皇室筋のとある邸に)おはしまし着きて(お着きになり)、預り(管理人を)召し出づるほど(呼び出している間に)、荒れたる門の忍ぶ草(しのぶぐさ、シダ草)茂りて(茂り覆う様を)見上げられたる(見上げていらしたが)、たとしへなく(実に鬱蒼とした)木暗し(こぐらし、木々が暗かった)。霧も深く、露けきに(朝露繁く)、簾をさへ上げたまへれば(車の簾までも上げていらしたので)、御袖もいたく濡れにけり(袖もずいぶん濡れてしまった)。

「まだかやうなることを(こんなことは)慣らはざりつるを(初めてなので)、心尽くしなることにも(色々気を揉む事も)ありけるかな(あるようだな)。

いにしへもかくやは人の惑ひけむ、我がまだ知らぬしののめの道 (和歌 4-7)

昔の人も迷ったか、今踏み分けるしののめの道 (意識 4-7)

*「しののめのみち」は「東雲の道」と読めば、東の空が明けて来て雲が見え出す曙の道ということで「早朝の道」であり「朝帰り」を意味する。また「しののめ」を「篠の芽」と読めば「草深い未踏の」という情景描写であると同時に、「芽の内に秘めた思い」をも意味する。そういう訳で「しののめのみち」は、この場面の全てを一語で言い表している。

慣らひたまへりや(あなたは前に之の道を通して慣れていますか)とのたまふ(と源氏がお尋ねになると)。女、恥ぢらひて(女は恥らいながら)、

「山の端の心も知らで行く月は、うはの空にて影や絶えなむ (和歌 4-8)

*この場面に即して其のまま読めば、「山の端」は源氏で「月」が夕顔。「上の空」は今でも「落ち着かない」様子を自他共に示す日常語なので、この歌はストレートに理解できて、其の味わい深さに驚くことが出来る。文字通りの情景詠みに、夕顔の不安が見事に織り込まれている、ということを其のままに感じる事が出来るのは有難い。

「ただただ旦那に従うばかり、朝を知らない日陰の女 (意識 4-8-1)

*しかし惟光の報告から、夕顔が頭中将の元彼女らしいと思っている源氏が「この恋の道知ってる？」と夕顔に聞いたのだから、それを受けての返歌としては其の問いかけへの答えも詠み込まれていると解すべきだろう。そして其れが見事に詠み込まれている事に作者の才知が窺える。ただ尤も、むしろこの歌の為に、全てが最初から仕組まれていたとも考えられる。また、それだからこそ、この歌は余程心して味わうべきものだとも言えそうだ。

「旦那に背いて隠れた月は、朝の空には居場所を失くす (意識 4-8-2)

心細く(不安です)」とて(と言って)、もの恐ろしう(とても怖がって)すごげに(気味悪そうに)思ひたれば(していた。その女の様子を見て源氏は)、「かのさし集ひたる住まひの(あの寄り合い住まいの騒々しい暮らしに)慣らひならむ(慣れた所為でなのだろうか)」と、をかしく思す(可笑しく思われた)。

御車入れさせて(やがて門が開かれて、車を邸内に案内させたが)、西の対(にしのたい、中央寝殿は天皇の御座なので客間に当たる西寝殿)に御座(おまし、居間)などよそふほど(などの支度が整うまで)、高欄に御車ひきかけて(車から牛を外して引き柄を上がり口に渡し掛けて)立ちたまへり(一行は車内でお待ちに為った)。右近、艶なる心地して(右近は久方の上流風雅に上気して)、来し方のことなども(以前の上流暮らしの日々なども)、人知れず思ひ出でけり(自分なりに思い出していた)。預り(留守預かりの管理人が)いみじく(懸命に)経営(けいめい、準備に奔走)しありく気色に(する様子を見て)、この御ありさま(この遊び人なる源氏の素性を)知りはてぬ(窺い知った)。

ほのぼのと物見ゆるほどに(やっとものが見える程度の空が白んできた時分に)、下りたまひぬめり(一行は車を降りて入室された)。かりそめなれど(急拵えだが)、清げにしつらひたり(部屋の設いはすっきりと整えられていた)。

「御供に人もさぶらはざりけり(御供の者も従えず)。不便なるわざかな(困ったものです)」とて(と言って出て来た管理人は)、むつましき(よく見知った)下家司(しもけいし、御家番ながら下級の者)にて、殿(との、左大臣邸)にも仕うまつる(つかうまつる、出入りして親しい)者なりければ、参りよりて(御座近くまで寄って)、「さるべき人召すべきにや(誰か人を御呼びになった方が宜しいのでは御座いませんか)」など、申さすれど(侍女を通して申し上げて来たが)、

「ことさらに(特にわざと)人来まじき(ひとくまじき、人が寄り付かない)隠れ家求めたるなり(隠れ家を探して来たのだ)。さらに(そこを良く)心より(含んで)ほかに漏らすな(口外致すな)」と(と源氏は下家司に)口がためさせたまふ(堅く口止めを命じられた)。

御*粥(おんかゆ、朝食)など急ぎ参らせ(まうらせ、作らせ)たれど、取り次ぐ(用意できる)御賄ひ(おんまかなひ、材料も人も)うち合はず(十分には揃わない)。まだ知らぬ(初めての)ことなる(殊なる、突飛な)御旅寝に(御外泊に)、「*息長川(おきながかは、二人きりで過ごそう)」と契りたまふことより(と辺り憚らず睦み合う)ほかのことなし(ばかりだった)。*「粥」には堅粥(かたがゆ、今の炊飯)と汁粥(しるがゆ、今のお粥)とがある、とのことだが、ここでは所謂「メシ」のことで、食事することを指していて、時刻からして朝食。*万葉集にある「にはほ鳥の息長川は絶えぬとも君に語らふ言尽きめやも」という歌を下敷きに愛を誓う、ということらしい。この歌は、川辺の友人との語らいで「この川が絶えても君とは語り尽きることがない」と詠んだもの、という。「鴉鳥にほどり」は「カイツブリ」の古名。カイツブリは長く潜水して魚を獲ることから、「にほどりの」は息長氏(おきながうじ、古代豪族)を通し其の勢力地にあった息長川の枕詞に使われた、という。またカイツブリは別の古名で「息長鳥しながどり」ともいわれ、これも枕詞らしいが、此方の意は雌雄の番で浮巣を作るカイツブリの習性を示す、ともいう。此方の意味だと息長川からは外れるが、寧ろこの場面の絵としては此方のほうが相応しい。そこで、当時の言葉使いは生物学的分類より言葉自体が持つ響きの情緒に依存した、と極め付けて、後者を正解とした。

(すっかり*良い思いをして其のまま朝寝を極め込んだ源氏は)日長くる(ひたくる、日が長じた昼)ほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ(格子のシトミ窓を自分で跳ね上げて開かれて、庭を御覧になった)。いと(また)いたく荒れて(随分と荒れて)、人目もなく(人の気配も無く)はるばると見渡されて(南庭遠く見渡せて)、木立いと疎ましく(うとましく、鬱蒼と)物旧りたり(ものふりたり、伸び放題を晒している)。け近き草木などは(直ぐ近くの草木などは)、ことに見所なく、みな秋の野ら(のら、野の雑草然)にて、池も水草に埋もれたれば、いと気疎げ(けうとげ、気味悪げ)になりける所かな。別納(べちなふ、別棟の下屋や納屋)の方にぞ、曹司(ざうじ、部屋)などして(など作って)、人住むべかめれど(用人が住まいとしている様だが)、こなたは離れたり(此処からは離れている)。*蛇足だが、読み手の自分自身の整理として、この<辺り憚らぬ情交>について少し考えて置きたい。何せ私は下々の身で、その道も極く控え目な者にして、実はこの辺りの事柄は難問ではある。ただ、この物語は女房語りになってをり、其の事が如何程度に当時の人々に説得力を持っていたのかを推察することは、相当に意義深くも思える。確か、この場面でも極く近くに右近がいるように思えるし、少なくとも、近くに人が居る内に睦み始めてはいる様だし、空蟬と西の君を取り違えたときにも、近くに人が居たかの描写があったが、其れが物語の説得力を持たせるための演出なのか、実情の描写なのか、が踏まえ切れない。寝殿の母屋の一部は塗籠(ぬりごめ)という土壁の密室になっていて、其処が寝室に使われたとも聞くが、物語にはそうした描写は無い。また枕絵に侍女を含めた乱交のような図柄も有るが、これは一層に写真と漫画が区別しにくい。右近にしても夕顔の第一秘書であり、そこそこの水準の人なのだろうが、女房という仕え人ということで、ある程度は生活感を持って想像出来るし、御手付き女中くらいに思えば、そのイキ所も見当がつく。しかし幾らか身を崩したとはいえ、公家筋の夕顔のような人や、まして御子たる源氏の君などの生活感は理詰めでは想像はするが、まるで実感は持てない。であれば、その人たちのイキ所も見当が付かない。一頃、フリー・セックスが持て囃されたエイズ以前の長閑な時代に、雑魚寝の中でも平気で事に及ぶのが流行った様な記憶もあるが、電気時代以前の大奥の宿直女中が聞き耳を立てる中での情交と、現代の文化とを簡単に比べるべきものとも思えない。是はもう、所詮私のような凡人が肉薄できる世界ではないと諦めて、階級社会に生きる人たちの切実な心理が現代人には奇妙に見えるだけなのだ、と思い込んで置くしかないのだろうか。だとすれば此処で改めて源氏の、希むべくは夕顔もの「良い思い」を考えた収穫は少ないが、重圧感があってこそ性的快感だけではない愉悦があって、貴族は其れを命がけで求めた、という大脳生理学的解釈風の間報告に今の所は留めて、先を読み進める。

「気疎くも(けうとくも、荒れていて何か出て来そうな)なりにける所かな(気配がする所だな)。さりとも(でもまあ)、鬼なども(鬼がいたとしても)我をば見許してむ(私を見咎める事も無いだろう)」とのたまふ(と源氏は仰せになる)。

顔はなほ隠したまへれど(そう言いながら顔をまだ袖で隠しなさったままだったが)、女のいとつらしと思へれば(夕顔が随分情けなく思っているの)、げに(確かに)、かばかりにて隔であらむも(このように他人行儀にするのは)、ことのさまに違ひたり(もう奇怪しい)と思して(とお思いになり)、

「夕露に紐とく花は玉銚の、たよりに見えし縁にこそありけれ (和歌 4-9)

「この際だから白状すると、五条で歌を受け取ったのは私でした (意識 4-9-1)

*是は相聞で最初から意味深長な言葉が続く。先ずは今の場面に即して解す。「夕露に」は<露を詠んだ夕顔の貴方に>。「紐解く花は」は<顔を見せる私は>。「玉銚の(たまほこの)」は矛先の意で<進む道>に掛かる枕詞なので、「玉銚の便り」で<道すがらに知った>の意味となつて、<五条大路で出会って>をいう、とのこと。また「たより」は手紙でもあるから「便りに見えし」は<手紙を交した>。「えにこそありけれ」は<其の事からでした>。つまり、この歌は贈歌の形だが此処での発句ではなく、五条大路での初見で夕顔が詠んだ「心あてに其れかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花(和歌 4-1)」に対する実質的な返歌だ、ということらしい。あの時点での形の上での返歌は「寄りてこそ其れかとも見めたそかれに仄ぼの見つる花の夕顔(和歌 4-2)」だったが、女は源氏を彼の遣り取りをした相手とは未だ見知っていなかったの、形式では遣り取りしていても、実質の遣り取りは未だしていなかった事になる。勿論、源氏の方は初めから女を歌の相手と知った上で近付いては居たが、彼の遣り取りが勘違いの上の行き違ひだった事を、今の二人は其の行き違ひの当事者同士として、今此処で初めて認識し合う、と言う場面である。さんざん体を重ねて来て何を今更、の感はずえないが気持ちこそが意味だとすれば、今こそ袖を払って顔を晒すので互いに確かめ合ひましょう、という所か。此処で二人がお互いに其々の歌を、如何いう心算で詠んで、如何受け取ったのかを、話題にすれば多くの事が明示されたのだろうが、それでは趣が無い。いや、源氏が本当に伏せていたのは女の歌意を察していた事だが、それは未だ言えない。つまり満を持して、其の意地汚い(と私は思うし、其れが美男子の特性だとも作者が言っているような)己の正体の一端を今、「紐解く=明かす」というわけだ。

「濡れた貴方の花びらを、突付いた甲斐がありました (意識 4-9-2)

*只此処でも、今で言うイヤラシサ、当時で言う趣、は込められている。何故今此処で返歌するのか、ということである。それは今だから「玉銚の」と詠めた、という事に他ならない。「玉銚」は文字通り尊い矛の事で、正しく「珍矛」である。その珍矛が「便りに見えし=訪れて契った」「夕露に紐とく花=濡れて開いた夕顔の花弁」は「縁にこそありけれ=思いを遂げたものだった」という実に率直な吐露となっている。また「え(縁)にこそ」を女陰の淵と見れば、「たよりに見えし」は夕顔が素直な性反応をしたので源氏が弄り甲斐が有ったとも、突く度に上げる声が艶めかしかった、とも読める。女も廢れたとは言え院というほどの規模の大邸宅に連れ込まれて、源氏の高貴な身分の一端を知って一安心したのだろうか、素直に性戯を楽しんだようだ。

露の光やいかに(で、あらためて露の光具合は如何でしょうか)とのたまへば(と仰せられれば夕顔は)、後目に(しりめに、背を向けたまま)見おこせて(見流して)、

「光ありと見し夕顔のうは露は、たそかれ時のそら目なりけり」(和歌 4-10)

*字面自体は「夕顔の露が光ったように見えたのは黄昏時の思い過ぎでした」なので、(意識 4-9-1)に対する答えとしては、

「願い事がありまして、夕暮れについて人違い致しました」(意識 4-10-1)

*(意識 4-9-2)の答えとしては、

「少しは期待してたけど、見掛けよりずっと凄いのね」(意識 4-10-2)

とほのかに言ふ(と恥ずかしげに言う)。をかしと思しなす(源氏はお気に召した)。げに、うちとけたまへるさま(満ち足りたひと時は)、世になく(格別だったが)、所から(荒れた屋敷の様子)、まいて(妙に)ゆゆしきまで見えたまふ(異界の相を呈していた)。

「尽きせず(あなたが何時までも)隔てたまへる(身の上を隠し通しなさる)つらさに(他人行儀に)、あらはさじと思ひつるものを(私も今まで名乗らずにきたものを)。今だに(もう今こそは)名のりしたまへ(あなたは名乗って身分を明かして下さい)。いと(何とも)*むくつけし(胸が支えて落ち着きません)」 *「むくつけし」は<ムカつく、胸が支えて気分が悪い>だろうか。それにしても、こういう言い方が良く出来たもんだと尽思。源氏にはずっと、夕顔にも頭中将にも僅かには撫子にも、後ろめたさが在ったのである。しかし、そういう秘め事ではもう自分の気が収まらないと意を決して、身分を明かして堂々と付き合う事にした。そして、いよいよ名乗り合おうかという場面ようだ。まだ名乗り合っていないが、自分の領分に招いて、それなりの地位を知らしめた上で、女もその事情を承知した上で改めて、自分のホコで女のホトが濡れたと見るや、源氏は征服感丸出しである。でも、女もそういう男を頼りにしたがるようではある。どうせ勝手に遣って貰うしかないのだが、「むくつけし」には<気味が悪い、恐ろしい>の意味もあり、発した言葉に動かされた空気がその意味の事態を引き起こす、という不吉な予言を敢えて此处で源氏に作者は言わせた。此处に来て、さつき源氏が軽口のように言った「気疎くもなりにける所かな。さりとも、鬼なども我をば見許してむ」という台詞が、俄かに不気味に響く。中はホッコリでも、外はノッソリだぞ。

とのたまへど(と源氏が仰せでも夕顔は)、「海人(あま、軀一つで稼ぐ其の日暮らしの卑しい家)の子なれば」とて、さすがに(依然)うちとけぬさま(頑なな様子で)、いと(さっぱり)あいだれたり(事が捗らない)。

「よし(まあいい)、これも*我からなめり(其のうち分かるだろう)」と、怨みかつは語らひ(気にしつつも取り留めなく語らって)、暮らしたまふ(其の日を過ごされた)。 *「割れ殻」という海虫が乾くと殻が割れることから、時が来れば事態が変わる、自ずから、との意。

惟光、尋ねきこえて(惟光が知らせを受けて当院まで)、御くだものなど参らす(菓子など持って参じた。が、しかし)。右近が言はむこと(右近が今までの惟光のお惚けに文句を言うのが目に見えて)、さすがにいとほしければ(さすがに煩いので)、近くもえさぶらひ寄らず(源氏の側近くまでは寄れなかった)。「かくまでたどり歩きたまふ(こんな隠れ家まで使うとは)、をかしう(随分入れ込んだものだ)、さもありぬべきありさまにこそは(それほどの女だったのだろうか)」と推

し量るにも(と惟光は想像しながらも、もし夕顔がそれほどの女だとしても)、「我がいとよく(その気になれば自分でも上手く)思ひ寄りぬべかりしことを(言い寄ることが出来たものを)、譲りきこえて(君にお譲り申したのは)、心ひろさよ(我ながら余裕だったな)」など(などと身勝手に)、めざましう思ひをる(思い上がっていた)。

たとしへなく静かなる夕べの空を(例え様も無く静かな夕べの空を)眺めたまひて(御覧になると)、奥の方は暗う(部屋の奥は暗くて)ものむつかしと(気味が悪いと)、女は思ひたれば(女が思っている様だったので、源氏は)、端の簾を上げて(簾を一間分巻き上げて夕日を差し入れてから)、添ひ臥したまへり(添い寝された)。夕映えを見交はして(夕日に映えた互いの顔を見交わしていると)、女も、かかるありさまを(女も之の急な外泊を)、思ひのほかにあやしき(意外な事で何か不思議な)心地はしながら(気持ちでは居たものの)、よろづの嘆き忘れて(不安は薄れて)、すこしうちとけゆく気色(次第に落ち着いた様子で)、いとらうたし(とても愛らしかった)。つと御かたはらに(びたりと御側に)添ひ暮らして(一日添って)、物をいと恐ろしと思ひたるさま(物怖じしている女の姿は)、若う心苦し(子供っぽくていじらしかった。其の様子を見て源氏は、)。格子とく下ろしたまひて(格子窓を早く御下ろしになって)、大殿油(おほとなぶら、殿中燈を)参らせて(灯させ為さって)、「名残りなくなりたる(存分に歓喜を交わした)御ありさまにて(この期に於いても)、なほ(まだ)心のうちの隔て残し(素性を隠そうと)たまへるなむ(為さるのは)つらき(残念です)」と、恨みたまふ(と、嘆息された。そして付と、)。

「内裏に、いかに求めさせたまふらむを(上は私を召して人に呼ばせて居られるかも知れないが)、いづこに尋ぬらむ(何処を探しているものやら)」と、思しやりて(と思い遣ったり)、かつは(また)、「あやしの心や(不思議な気分がするものだ)。六条わたりにも(六条の御方も)、いかに思ひ乱れたまふらむ(どんなにか無沙汰を嘆いて居られる事だろう)。恨みられむに、苦しう(恨まれるのは辛い)が、ことわりなり(無理も無い)」と、いとほしき筋は(義理ある大殿を差し置いても愛しい女の事を)、まづ思ひきこえたまふ(先に気に掛けて心配なされた。すると其れに引き換えて、)。何心もなき(無心のままで)さしむかひを(今向き合っている夕顔が)、あはれと思すままに(何とも可愛く思えて)、「あまり心深く(あまりにも思慮深く)、見る人も(一緒に居ると)苦しき(息が詰まる)御ありさまを(性格が)、すこし取り捨てばや(もう少し無くなれば)」と(と六条のお方を)、思ひ比べられたまひける(思い比べ為されていた)。

[第四段 夜半、もののけ現われる]

宵過ぐるほど(夜も更けて)、すこし寝入りたまへるに(少し寝入られた頃)、御枕上(おんまくらがみに、源氏の枕元に)、いとをかしげなる女ゐて(それは美しい女が座し現れて)、

「己が(おのが、わたしが)いと(どんなにか)めでたしと見たてまつるをば(御慕い申上げておりますものを)、尋ね思ほさで(御寄り下される事も無く)、かく(こうした)、ことなることなき人(取るに足りない身分の者を)率ておはして(御連れ込みになって)、時めかしたまふこそ(情交に時を費やされ為されるなどは)、いと(ひどく)めざましく(心外で)つらけれ(無残です)」

とて(と言って)、この御かたはらの人を(傍らに寝居る夕顔を)かき起こさむとす(峯り起こそうとするように)、と見たまふ(見受けられ為された)。

物に襲はるる心地して(源氏は物の怪に憑かれたかと)、おどろきたまへれば(驚いて目を覚まされたが)、火も消えにけり(既に燈し火も消えていた)。うたて思さるれば(何か不吉を感じられたので)、太刀を引き抜きて(魔除けに刀を抜いて)、うち置きたまひて(そっと枕元にお置きに成ってから)、右近を起こしたまふ(右近を呼び起こされた)。これも(呼ばれた右近も灯の無い暗がりに)恐ろしと思ひたるさまにて(恐る恐る)、参り寄れり(近寄り参じた)。

「渡殿なる(廊下に居る)宿直人(とのみびと、護衛番を)起こして、『*紙燭さして参れ(明かりを用意して直ぐ参れ)』と言へ(と申し付けよ)」とのたまへば(という源氏の仰せに、右近が)、*「紙燭しそく」は簡易松明。松の枝を50cm程の棒状に削り、先を焦がして油を塗ってから点灯し、手元に紙を巻いて掲げ持つ、とのこと。

「いかでかまからむ(とても行けません)。暗うて(暗いので)」と言へば(と答えたので)、

「あな(何を)、若々し(子供みたいな)」と(と源氏は)、うち笑ひたまひて(笑い飛ばされて)、手をたたきたまへば(手を叩いて人を御呼びに為ったが)、山彦の答ふる声(其の音が部屋中に木霊して響いて)、いと(余計)うとまし(気味が悪かった)。人え(まして誰一人と)聞きつけで(その音を聞き付けずに)参らぬに(参じないので)、この女君(夕顔は)、いみじく(ひどく)わななきまどひて(怯えて震え出しては)、いかさまにせむと(どうしたものかと)思へり(困惑していた)。汗もしとどになりて(汗びっしょりで)、我かの気色なり(朦朧とした様子だった)。

「物怖ぢをなむ(この御方は此に彼く物怖じを)わりなくせさせたまふ(無闇に為さる)本性にて(御気性なので)、いかに(今どれ程の)思さるるにか(御心持ちで居られるものか)」と、右近も聞こゆ(右近も申す。すると源氏は)。「いと(ほんとに)か弱くて(気弱で)、昼も(日中も)部屋の暗さを恐れて)空をのみ見つるものを(空ばかり見ていたが)、いとほし(可哀想なことだ)」と思して(と御思いに為って)、

「我、人を起こさむ(私が人を起こしてこよう)。手たたけば、山彦の答ふる(手を叩けば山彦がして)、いとうるさし(煩くてしょうがない)。ここに、しばし、近く」

とて(と言って女君の許へ)、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の火も消えにけり(廊下の明かりも消えていた)。

風すこしうち吹きたるに、人は少なくて、さぶらふ限り(目にする限り控えの者は)みな寝たり。この院の預りの子(管理人の倅で)、むつましく(平素)使ひたまふ若き男(をのこ、側仕えする若侍と)、また上童(うへわらは、殿上見習いで夕顔に出向く際に連れ立った男の子)一人、例の(それと例の)隨身ばかりぞありける(護衛官の三人だけが居るばかりだった)。召せば(源氏が御声を掛けると)、御答へして起きたれば(近くに居た若侍が返事をして起きて来たので)、

「紙燭さして参れ。隨身も(護衛官にも)、弦打(つるうち、弓の弦を空弾きして魔除けの音を鳴らす)して、絶えず声づくれ(ずっと音を立てているように)と仰せよ(と申し付けよ)。人離れたる所に(こんな人気の無い所では)、心とけて寝ぬるものか(安心して眠れたものではない)。惟光朝臣(これみつのあそん、惟光の奴)の来たりつらむは(が先程に来ていたようだが、どうしているのか)」と、問はせたまへば(と、お尋ねになると若侍は)、

「さぶらひつれど(宵口まで控えて居りましたが)、仰せ言もなし(御用も無い様なので)。暁に御迎へに参るべきよし(明朝早くにお迎えに参じると)申してなむ(言い残して)、まかではべりぬる(帰りまして御座います)」と聞こゆ(と申し上げた)。この、かう申す者は(この答えた管理人の倅の若侍は)、*滝口(たきぐち、近衛の精鋭)なりければ、弓弦(ゆづる、弓の弦)いと尽き尽きしく(つきづきしく、手馴れて)うち鳴らして、「火あやふし(火の用心)」と言ふ言ふ(言いながら)、預りが(親の管理人の)曹司の方に(部屋の方へ明かりを取りに)去ぬなり(去って行った)。内裏を思しやりて(源氏は御所を思い出して)、「*名対面(なだいめん)は過ぎぬらむ(過ぎただろう)、滝口の*宿直奏し(とのみまうし)、今こそ(今ぐらいだろうか)」と、推し量りたまふは(と推し量られたが)、まだ(亥の二刻にまでは至らずに)、いたう(然程は)更けぬにこそは(夜更けてもいないとお思いだった)。*「滝口」は滝の落ち口だが、特に御所清涼殿東庭前の涼水を通す溝へ水溜まりから20cmばかり落ちる水口、及び其の水溜まりの固有名であり、其処が警備士の詰所となっていた。「滝口」は帝の昼御座たる清涼殿の正面警備なので、近衛の精鋭中の精鋭が詰めることとなり、其の警備武官を指し示す固有名でもあった。*「名対面」は宮中での定時点呼で蔵人宿直番が名乗り合う当番確認。定時は亥の一刻で、今の午後9時。*「宿直奏し」は名対面に続いて夜警の近衛が名乗る。近衛府は抜き無きを期して左右の二府制となっていて、亥の一刻(いのいっとき、21:00)から子の四刻(ねのしとき、0:30~1:00)までを左近の司、丑の一刻(うしのいっとき、1:00)から寅の四刻(とらのしとき、4:30~5:00)を右近の司、が交代で務めた。交代時も名乗った。

帰り入りて(閨に戻って)、探りたまへば(手探りなされると)、女君はさながら臥して(女君は元通りに横に為っていたが)、右近は(右近までが)かたはらにうつぶし臥したり(側にうつ伏せになっていた)。

「こはなぞ(これはどうした)。あな(全く)、もの狂ほしの物怖ぢや(見境なしの怖がり様ではないか)。荒れたる所は(このような荒れ屋敷には)、狐などやうのもの(狐などの物の怪が)、人を脅やかさむとて(人を脅かすものと)、け恐ろしう(恐ろしげに)思はするならむ(思っているのだろう)。まろあれば(私が居るからには)、さやうのものには脅されじ(然様な者に脅されはしない)」とて(と言って右近を)、引き起こしたまふ(引き起こし為された)。

「いと(とても)うたて(気味が悪いので)、乱り心地の悪しうはべれば(気が動転いたしまして)、うつぶし臥してはべるや(うつ伏せておりました)。御前にこそ(御前様こそ)わりなく思さるらめ(気分を悪くされて居られましように)」と言へば(と右近が言うので、源氏は)、

「そよ(おお、そうだ)。などかうは(どうしてこんな)」とて(と言って女君の様子を)、かい探りたまふに(お確かめになると)、息もせず(息も無い)。引き動かしたまへど(揺り動かしても)、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば(意識が戻らぬようなので)、「いと(また)いたく若びたる人にて(ひどく子供じみた人なので)、物に(物の怪に)気盗られぬる(けどられぬる、取り憑か

れてしまった)なめり(ようだ)」と、為む方無き(せむかたなき、為す術も無い)心地したまふ(気持ちに御成りだった)。

紙燭持て参れり(若侍が明かりを持ってきた)。右近も動くべきさまにもあらねば(右近が其の明かりを取りにさえも行けない様なので)、近き御几帳を引き寄せて(源氏は間近の几帳を引き寄せて少し擦らして隙間を作ると、若侍に)、

「なほ持て参れ(そのまま持って参れ)」

とのたまふ(と仰せられた)。例ならぬことにて(しかし閨に侍が立ち入るは禁忌にて、若侍は)、御前近くもえ参らぬ(近付くことは疎か)、つつましさに(畏まって)、長押(なげし、帳台の敷居口)にもえ上らず(に上がる事さえしない)。

「なほ持て来や(早く持って来い)、所に従ひてこそ(場合に依るぞ=非常時だ=構わぬ)」

とて(と言って源氏は)、召し寄せて(若侍を近くに呼び寄せて)見たまへば(明かりを翳して夕顔の様子を御覧になると)、ただこの枕上に(その枕元に)、夢に見えつる容貌したる女(先程自分の枕元で夢に見た女が)、面影に見えて(幻に見えて)、ふと消え失せぬ。

「昔の物語などにこそ(昔話なら)、かかることは聞け(こんな事もあったが)」と(と源氏は)、いと(ほんとに)めづらかに(不思議など)むくつけけれど(気味悪く思われたが)、まづ、「この人いかになりぬるぞ」と思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず(身の危険も顧みず)、添ひ臥して(夕顔に添い臥して)、「やや(これ、これ)」と、おどろかしたまへど(起こそうと為さるが)、ただ冷えに冷え入りて、息は疾く(とく、とっくに)絶え果てにけり(絶え果てていた)。言はむかたなし(言葉も無い)。頼もしく(頼むべき)、いかにと言ひ触れたまふべき人もなし(相談できる人も居ない)。法師などをこそは(敢えて言えば僧侶などが)、かかる方の(このような時には)頼もしきものには(頼りに成るのかとも)思すべけれど(思ったりもしたが)。きこそ強がりたまへど(そのように強がってみても)、若き御心にて(若く熱い想いが胸を衝いて)、いふかひなくなりぬるを見たまふに(夕顔の果敢ない姿を御覧になれば)、やるかたなくて(源氏は偏に遣る瀬無く)、つと抱きて(ひしと女君を抱きしめて)、

「あが君(我が君)、生き出で(生き返り)給へ(たまへ、為され)。いと(こんな)いみじき目な(酷い目に)見せたまひそ(遭わせないで下され)」

とのたまへど(と話されるが)、冷え入りにたれば(夕顔の体は冷え切っていて)、けはひ(気配は)ものうとくなりゆく(遠去かるばかりだった)。

右近は、ただ「あな(おお)、むつかし(怖い)」と思ひける(とだけ思っていた)心地みな冷めて(気持ちはすっかり失せて)、泣き惑ふさま(泣き崩れる様たるや)いといみじ(もう大変だった)。

南殿の鬼の、某の大臣脅や可し経る*例ひ(なでんのおにのなにがしのおとどおびやかしかけるとひ)を思し出でて(を思い出した源氏は)、心強く(気を強く持って)、*藤原道長を讃えるという史書『大鏡』によると、藤原忠平が紫宸殿(南殿)で鬼と出会ったが、一喝して退散させたという話がある、という。

「さりとも(こうなったからといって)、いたづらに(このまま女君が亡くなって)なり果てたまはじ(しまいはしないだろう)。夜の声は(夜の泣き声は)おどろおどろし(大袈裟に響いて)。あなかま(やかまし過ぎる)」

と諫めたまひて(と右近を諫め為されて)、いとあわたたしきに(余りの急変に)、あきれたる心地したまふ(啞然とされていた)。この男を召して(そして若侍に)、

「ここに、いとあやしう(実に奇怪にも)、物に襲はれたる人の(魔物に襲われた人が)なやましげなるを(苦しんでいるので)、ただ今(今すぐ)、惟光朝臣の宿る所(やどるところ、五条の家)にまかりて(に行つて)、急ぎ参るべきよし言へ(急ぎ此処へ来るよう言え)、と仰せよ(と隨身を遣いに立てよ)。なにがし阿闍梨、そこにもものするほどならば、ここに来べきよし、忍びて言へ(密かに言え)。かの尼君などの聞かむに(聞くだろうから)、おどろおどろしく言ふな(大事にして言うな)。かかる歩き(ありき、尼君は斯かる私の外泊を)許さぬ人なり(許さぬ人なので)」

など、物(事を順序だてて)のたまふやうなれど(仰せられた様なれど)、胸塞がりて、この人を空しく(死なせて)しなしてむことの(しまう事が)いみじく(耐え難く)思さるるに添へて(思われるのに加えて)、大方の(この事態全体の)むくむくしさ(不気味さたるは)、たとへむ方なし(例え様も無いものだった)。

夜中も過ぎにけむかし(夜中も過ぎているのだらう)、風のやや荒々しう吹きたるは(吹いている事からしても)。まして、松の響き、木深く聞こえて、気色ある(けしきある、風変わりな)鳥の枯声(からごゑ、乾いた声)に鳴きたるも(で鳴くのを聞けば)、「*梟(ふくろふ、昔の歌で不吉相に例えられた鳥)」はこれにやとおぼゆ(は之の事かとお思いになる)。うち思ひめぐらすに(考えてみれば)、こなたかなた(此処は如何にも)、気遠く(けどほく、物寂しく)疎ましきに(気重で)、人声はせず(人の声も聞こえず)、「などて(どうして)、かく(このような)はかなき(心細い所に)宿りは取りつるぞ(外泊をしてしまったのだらうか)」と、悔しさも(悔やんでみても)遣らむ方無し(やらむかたなし、紛らし様も無い)。*白楽天の詩に「梟が松に鳴き、狐が草むらに暮らす」という不吉相を描いた歌が在る、とのこと。

右近は、物もおぼえず(右近は心此処に非ず)、君につと(源氏にぴったりと)添ひたてまつりて(縋り付いて)、わななき死ぬべし(震え死にしそうだった)。「また、これもいかならむ(この者も如何なる事やら)」と(と源氏は)、心そらにて(心許無く)捉へたまへり(右近を抱えていらした)。我一人さかしき人にて(自分だけが正気かと思うと)、思しやる方ぞなきや(暗然とした)。

火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上(びやうぶのかみ、遮られた所)、ここかしこの隈々しく(暗く陰つて)おぼえたまふに(見える上に)、物の足音(魔物の足音が)、ひしひしと踏み鳴らしつつ、後ろより寄り来る心地す。「惟光、とく参らなむ(早く来ないものか)」と思す。ありか定めぬ者にて(しかし惟光は身持ちの固くない遊び人なので)、ここかしこ尋ねけるほ

どに(あちこちと探し倦ねている内に)、夜の明くるほどの久しきは(ひさしきは、待ち遠しきは)、千夜(ちよ)を過ぎさむ心地したまふ(一日千秋の想いだった)。

からうして(辛うじて)、鶏の声はるかに聞こゆるに(朝の訪れに安堵して)、「命をかけて、何の契りに(何の因果で)、かかる目を見るらむ。我が心ながら(我ながら)、かかる筋に(恋路に)、おほけなく(分別なく)あるまじき(非道な)心の報いに(やましきの報いとして)、かく、来し方行く先の例と(後先の語り草と)なりぬべきことは(なつてもしょうがない事は)あるなめり(あるのだろう)。忍ぶとも(隠しても)、世にあること(本当のことは)隠れなくて(隠し切れずに)、内裏に聞こし召さむをはじめて(帝がお知りになるのを初めとして)、人の思ひ言はむこと(世間が思い噂すること)、よからぬ童べの(悪童の)口ずさびになるべきなめり(吹聴する所と成ってしまうのだろう)。ありありて(そんなこんなで仕舞いには)、をこがましき名をとるべきかな(悪名を轟かせる事に成るのだろうか)」と、思しめぐらす。

[第五段 源氏、二条院に帰る]

からうして(辛うじて、ようやく)、惟光朝臣参れり。夜中、暁といはず(夜朝問わず)、御心に従へる者の(側に付き従う者が)、今宵しも(今宵図らずも)さぶらはで(待機せず)、召しにさへ(御呼び立てにも)おこたりつるを(遅れを取ったことを)、憎しと(何と間が悪い事かと)思すものから(源氏はお思いになったものの)、召し入れて(ともかくは近くに呼び寄せて)、のたまひ出でむことの(言い出そうとした事の)あへなきに(余りにもの顛末に)、ふとも(咄嗟には)物言はれたまはず(何もお話に為れなかった)。右近、大夫のけはひ聞くに(右近は惟光の参上を聞くと)、初めよりのこと(彼の画策と取次ぎで始まった源氏と夕顔との経緯を)、うち思ひ出でられて泣くを(あれこれ思い出して涙したので)、君もえ堪へたまはで(源氏もとても堪え切れずに)、我一人さかしがり(夜通し一人気丈に)抱き持たまへりけるに(右近を抱きかかえて御出でだったことから)、この人に(惟光に会えて)息をのべたまひてぞ(息が継げたやつの思いで)、悲しきことも思されける(悲しみが込み上げて来て)、とばかり(暫く)、いと(それはもう)いたく(大変に)、えもとどめず(止め処も無く)泣きたまふ(お泣きになった)。

ややためらひて(ややあって一頻り)、「ここに(昨夜)、いと(全く以って)あやしきことのあるを(奇怪な事が起こったが)、あさましと言ふにも(意外と言うには)あまりてなむある(余り有るものだ)。かかる頓の事(とみのこと、危急の折)には、誦経(ずきやう、僧に読経を上げてもらう)などをこそはすなれとて(などは先ずするものであろうから)、その事どもも(それらの手配を)せさせむ(しなければならぬ)。願(ぐわん、神仏祈祷)なども立てさせむとて(なども立てさせなければならぬので)、阿闍梨(あざり、仏門僧一般の事だが此処では惟光の兄)ものせよ(を同伺せよ)、と言ひつるは(と言って置いたが、どうした)」とのたまふに(と源氏が仰せになったので、惟光は答えた)、

「昨日(きのふ)、山へまかり上りにけり(比叡山に帰りまして御座います)。まづ(それにしても)、いと(何とも)めづらかなる(変な)ことにもはべるかな(事態では御座いますな)。かねて(女君は昨夜は何か)、例ならず(いつもとは違う)御心地ものせさせ(御様子を成されて)たまふこと(やは)べりつらむ(居られましたのでしょうか)」

「さることもなかりつ(そのような事も無かった)」とて、泣きたまふさま(お泣きになる源氏の姿は)、いと(実に)をかしげに(清楚で)らうたく(労しく)、見たてまつる人も(目にした惟光までも)いと(ぐっと)悲しくて(悲しみを覚えて)、おのれもよよと泣きぬ(つい涙した)。

さいへど(そうは言っても)、年うちねび(年もずっと大人びて)、世の中の処在る事と(とあることと、とかく在る雑事に)、潮染みぬる(しほじみぬる、世慣れた)人こそ、ものの(こうした生死往来発着という生活の様変わりに際しての)をりふしは(世の習いには)頼もしかりけれ(頼もしいところだが)、いづれもいづれも(どちらも)若きどちらにて(若人同士なので)、言はむ方もなけれど(これと言う対処に窮したが、惟光が)、

「この院守(あんもり、管理人)などに聞かせむことは(知らせるのは)、いと(少し)便なかるべし(具合が悪いでしょう)。この人(この者)一人こそ(こそは)睦しくもあらめ(親しくもして居られましょうが)、おのづから(どうしても)物言ひ漏らしつべき(秘密を洩らしてしまう)眷属(けんぞく、親族)も立ちまじりたらむ(も中には居るでしょうから)。まづ(先ずは)、この院を出でおはし(此処を御出に成られ)ましね(為されませ)」と言ふ。

「さて、これより人少な(ひとつくなく、此処よりも人が少ない)なる所は(所と言え)いかでかあらむ(何処が在るのだろう)」とのたまふ(と源氏は話される。すると惟光は)。

「げに(実に)、さぞはべらむ(其の事で御座います)。かの故里は(ふるさとは、あの夕顔の家に連れ帰れば)、女房などの、悲しびに堪へず、泣き惑ひはべらむに(泣き騒ぐでしようし、そうなれば)、隣しげく(隣近所も多く)、とがむる里人(何事かと怪しむ住人が)多くはべらむに(大勢居りますので)、おのづから聞こえはべらむを(何かと噂が立ちますれば)、山寺こそ(山寺なれば)、なほ(また)かやうのこと(このような弔い事も)、おのづから(当然に)行きまじり(行われますので)、物(上手く)紛ること(誤魔化せること)はべらめ(御座いましょう)」と、思ひまはして(と思ひ廻らせて)、「昔(旧く)、見たまへし女房の(見知った女房が)、尼にてはべる(尼となっている)東山の辺に(ひむがしやまのへに、東山の方へ)、移したてまつらむ(お移し致しましょう)。惟光が父の朝臣の乳母にはべりし者の(父の乳母だった者が)、端齒ぐみて(みづはぐみて、年老いて)住みはべるなり(住んで居ります)。辺りは(わたりは、其の辺りは)、人しげき(人が賑わう)やうにはべれど(様な所ですが)、いと(其処はとても)かごかに(静か)はべり(御座います)」

と聞こえて(と申し上げて)、明け離るる(あけはなるる、夜明けで人が起き出す)ほどの紛れに(慌しさに紛れて)、御車寄す(西殿の階に車を寄せさせた)。

この人を(夕顔の亡骸は)え(源氏にはとても)抱きたまふまじければ(抱え上げられそうに無いので)、上蓆(うはむしろ、帳台敷布)に押し包みて(おしくくみて、押し包んで)、惟光乗せたまつる(惟光が御車に御乗せした)。いとささやかに(とても小柄で)、疎ましげもなく(気味悪さも無く)、らうたげなり(労しかった)。したたかに(念入りに)しも(夕顔の形を整える)え(には)せねば(及ばなかった)ので、髪はこぼれ出でたるも(髪が蓆から垂れ出た姿に)、目くれ惑ひて(源氏は目が暗む気がして)、あさましう悲し(耐え難く悲しい)、と思せば(とお思いになって)、なり果てむさまを見む(最後まで見届けよう)と思せど(と思われたが)、

「はや、御馬にて、二条院へ(にじゃうのみんへ、早く御馬で二条院へ)おはしまさむ(お戻り下さい)。人騒がしくなりはべらぬほどに(余り人目に立たぬ内に)」

とて(と惟光が源氏を制して)、右近を添へて乗すれば(右近を遺骸に添えて車に乗せると)、徒歩より(かちより、自分は歩きとして)、君に馬はたてまつりて(源氏を馬に御乗せして)、くくり引き上げなどして(袴の裾を括り引き上げながら今の光景を見返せば)、かつは(たしかに)、いとあやしく(随分奇妙で)、おぼえぬ(急な)送りなれど(野辺送りだが)、御気色のいみじきを見たてまつれば(源氏の途方に暮れた御姿を見れば)、身を捨てて行くに(惟光は自分の役回りを承知して東山へと出発するが)、君は物もおぼえたまはず(源氏は茫然)、我かのさまにて(自失のまま)、おはし着きたり(二条院へとたどり着かれた)。

人びと(二条院の女房たちは源氏を迎えて)、「いづこより、おはしますにか(何処からお戻りに成られましたか)。なやましげに(御気分が悪そうに)見えさせたまふ(御見受け致しますが)」など言へど(などと言っていたが)、御帳の内に入りたまひて(源氏は寝台の中へお入りになると)、胸をおさへて思ふに(胸を押さえて考え込み)、いと(ひどく)いみじければ(悩ましく)、「などで(どうして)、乗り添ひて行かざりつらむ(一緒に乗って行かなかったものか)。生き返りたらむ時(生き返ったとしたら)、いかなる心地せむ(彼の君はどんな気持ちになるものか)。見捨てて(私が女君を見捨てて)行き離れに去りと(いきあかれにけりと、行ってしまったと思って)、つらくや思はむ(悲しまれるだろうに)」と、心惑ひのなかにも(と落ち着きも無く)、思ほすに(お思いになって)、御胸せきあぐる心地したまふ(胸に自責の念が込み上げてくるようだった)。御頭(みぐし、源氏は頭)も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく、惑はれたまへば、「かく(こうも)はかなくて(気が気で無いようでは)、我もいたづらになりぬるなめり(自分も死んでしまうかもしれない)」と思す(とお思いになる)。

日高くなれど、起き上がりたまはねば(日が昇りすっかり明るくなっても起きて来られないので)、人びと(側仕えの人たちが)怪しがりて(あやしがりて、源氏の容態を案じて)、御粥など(軽食を)唆し(そそのかし、お勧め)きこゆれど(申し上げるが)、苦しくて(源氏は気が重く受け付けず)、いと(とても)心細く思さるるに(心細く御思いの内に)、内裏より御使あり(御所からの御使者があった)。昨日(きのうは)、え(ついに)尋ね出でたてまつらざりしより(源氏を御探し出す事が出来なかったので)、おぼつかながらせたまふ(帝は御心配なされて御出ででした。と言って御使には、)。大殿の君達参りたまへど(左大臣家の公達が遣って来ていた。しかし源氏は其の中から)、頭中将ばかりを(頭中将一人だけを御呼びになり)、「*立ちながら、こなたに(この帳台口)入りたまへ(お出下さい)」とのたまひて(と仰せになり)、御簾の内ながら(御簾越しのまま)のたまふ(中将にお話しされた)。 *「立ちながら(立ったままで)」とは躊躇せずにということで、通常なら貴人に対して不敬となる行儀だが、穢れた者の居間に跪くと穢れるので、敢えて其の無礼な作法を配下に申し付けることで、配下の穢れを避けさせる配慮を示した事になる。つまりは、こういう言い方をしただけで、暗に自分が穢れた身である事を知らせている。

「乳母にてはべる者の、この五月(さつき)の頃合より(ころほひより)、重く患い侍りしが(わづらひはべりしが)、頭剃り(かしらそり、剃髪し)忌むこと受けなどして(出家して尼になり)、そのしるしにや(其のお陰で)、よみがへりたりしを(持ち直していましたが)、このごろ、またお

こりて(また悪化して)、弱くなむなりにたる(弱っておりました)、『今一度(いまひとたび)、とぶらひ見よ(見舞いに来てくれ)』と申したりしかば(と申して来ていたので)、幼きなき(いときなき、幼い頃)より馴染さひし(なづきひし、慣れ親しんだ)者の、今際の刻みに(いまはのきざみに)、つらしとや思はむ(連れなかり、)と思うたまへて(と思われて)まかれりしに(出向いたところ)、その家なりける(其の家仕えの)下人の(しもびとの、下働きで)、病(やまひ、病氣)しけるが(だった者が)、にはかに(急に)出であへで(家から出る暇も無く)亡くなりけるを(亡くなってしまったのを)、怖ぢ憚りて(家人が私に穢れが及ぶことを恐れ憚って)、日を暮らしてなむ(日暮れを待って)取り出ではべりけるを(送り出しをした事を)、聞きつけはべりしかば(聞きつけましたので)、神事なるころ(かみわざなるころ、御所の神事を穢しては)、いと不便なること(まことに不都合なこと)、と思うたまへかしこまりて(と存知畏まって)、え参らぬなり(さすがに謹慎しております)。この暁より(また明け方から)、咳き病み(しはぶきやみ、風邪)にやはべらむ(を引いたのでしょうか)、頭(かしら)いと痛くて苦しく侍れば(はべれば、して居りますので、義兄に対しこのような御簾越しで)、いと(大変)無礼にて(むらいにて、失礼かとは存知ながら)聞こゆること(申し上げる次第です)」

などのたまふ(などと話された)。中将(すると中将は)、

「さらば(それでは)、さる(そうした)よしをこそ(言い方で)奏しはべらめ(帝にお伝え申し上げます)。昨夜も、御遊びに(御所の管弦演奏遊戯の席に)、かしこく(畏くも帝直々に)求めたてまつらせ(君を御呼び召しに)たまひて(為られたものの、君の御不在で)、御気色悪くはべりき(帝の御機嫌が悪う御座いました)」と聞こえたまひて(と御返事されて下がり掛けたが)、立ち返り、「いかなる行き触れ(いきぶれ、行き掛りの被穢)に懸からせ給ふ(かからせたまふ、襲われ為され)ぞや(ましたか)。述べやせたまふこと(お話に為られた事)こそ(は如何にも)、まことと(実際の事とは)思うたまへられね(思われませんが)」

と言ふに(と言ったので)、胸つぶれたまひて(源氏は虚を突かれ慌てて)、

「かく(何もそう)、こまかにはあらで(細かくでは無く)、ただ、おぼえぬ(思わぬ)穢らひに(死の穢れに)触れたるよしを(遭遇したとだけ)、奏したまへ(帝へは申し上げます)。いとこそ(全く以って)怠怠しく(たいだいしく、始末の悪い、見つとも無い)はべれ(次第です)」

と、つれなくのたまへど(と努めて平静に話されたが)、心のうちには、言ふかひなく悲しきことを思すに、御心地も悩ましければ、人に(中将に)目も見合せたまはず(目も合わせないまま下がらせ為された。しかし其の中将の様子からは是では不十分と感じて、更に事態の收拾を図るべく)。*蔵人弁(くらうどのべん)を召し寄せて(を呼び寄せて)、まめやかに(細々と辻褷立てて)かかるよしを(謹慎の事情を)奏せさせたまふ(帝に御報告申し上げさせ為された)。大殿などにも(また養父の左大臣にも)、かかることありて(こうした経緯で)、え参らぬ(お訪ねが出来ないとの)御消息など(御手紙を)聞こえたまふ(差し出され為された)。 *「弁官」は書記を司るものだが、官名としては武官たる「将官」に対する文官を指す。弁官局は大弁・中弁・少弁で構成されるが、行政実務の八省の上の政務協議者たる太政官に位して、掌管する省庁を四省づつ二分して左弁局と右弁局が設けられていた。大弁は参議であり役人の範疇を越えるので、御所仕えを実際に勤めるのは中将以下であった。其の中でも実権を持つ中弁が蔵人頭

(くらうどのとう、近侍長で文官と武官が各一名づつの定員)に任命された。参議未滿の武官筆頭たる頭中将(とうのちゅうじょう)に対して、文官筆頭たる頭弁(とうのべん)である。となれば此れは最早、有能な書記官などではなく、とはいえ無論、良家に生まれ育ち其れなりの資質ある者ではあろうが、天才ほどの有能者というよりは家柄に依るところの、最高級の貴人なのである。其れを実質の書記官として使えるのは、帝や源氏のような御子なればこそであり、彼らもまた其の近侍こそを旨として勤めてはいたのだろう。

[第六段 十七日夜、夕顔の葬送]

日暮れて、惟光参れり。かかる穢らひ(けがらひ、弔事)ありと宣ひて(のたまひて、お触れになつたので)、参る人びとも(来訪者も)、皆立ちながら(喪中を憚り門前で来訪だけ告げて)まかづれば(帰るので)、人しげからず(院内に人は疎らだった)。召し寄せて(源氏は惟光だけを近くに呼び寄せて)、

「いかにぞ(どうなった)。今はと見果てつや(やはり息絶えたか)」

とのたまふままに(と仰っては)、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も泣く泣く、

「今は限りにこそは(今を天命と)ものしたまふめれ(定められたもののようです)。長々と(いつまでも)籠もりはべらむも(隠して置いては)便なきを(良くありませんので)、明日なむ(明日がまた)、日よろしくはべれば(日柄が良いので)、とかくの事(その辺の葬儀の事情を)、いと(とても)尊き(偉い)老僧の(老僧で)、あひ知りてはべるに(良く承知している者に)、言ひ語らひつけ(分けを話し頼み申し付けて)はべりぬる(御座います)」と聞こゆ(と申し上げた)。

「添ひたりつる女はいかに(付き添いの女はどうした)」とのたまへば(とお聞きになると)、

「それなむ(其れ為る者は)、また、え(どうも)生くまじく(生きる気が無い)はべるめる(かのようです)。我も後れじと惑ひ侍りて(まどひはべりて、取り乱して)、今朝は谷に落ち入りぬ(いりぬ、入ろう)となむ(となる様を)見たまへつる(見て居ります)。『かの故里人に告げやらむ(五条の人々に知らせを遣わす)』と申せど(とも申すのを)、『しばし(今暫く)、思ひしづめよ(落ち着きなさい)、と。ことのさま(事情を良く)思ひめぐらして(考えて、ごらんなさい)』となむ(と言って)、こしらへおきはべりつる(因果を含めて置きました)」

と(と惟光は答えたが、源氏は其の)、語りきこゆるままに(語りを聞いて右近に同情する内に)、いと(ひどく)いみじと思して(悲しみに暮れて)、

「我も、いと心地悩ましく、いかなるべきにか(どうなってしまうのか)となむ(わからなく)おぼゆる(なってしまう)」とのたまふ(と話される。すると、)。

「何か(何をか)、さらに(この上また更に)思ほし(思い)ものせさせたまふ(悩まれます)。さるべきに(そうなるべく)こそ(定め)、よろづのこと(全ては)はべらめ(在ったのでしょう)。人にも(誰にも)漏らさじと(知られぬように)思うたまふれば(お計り申し上げたいので)、惟光おり

立ちて(惟光今より立ち返って)、よろづはものしはべる(万事の手筈を整えまする)」など申す(どのように惟光が申し上げた)。

「さかし(そうかもしれない。しかし)。さ皆思ひなせど(全てを然う思い倣して見ても)、浮かびたる(浮付いた)心のすさびに(心の赴くままに)、人を徒に為すつる(いたづらになしつる、死なせて仕舞った)託言(かごと、恨みを)負ひぬべきが(感じるので)、いと(とても)からきなり(つらくなる)。少将の命婦など(の身内)にも聞かすな。尼君まして斯様の事(かやうのこと、女遊びの果ての穢れ)など、諫めらるるを、心恥づかしくなむ(恥じ入るばかりに)おぼゆべき(思えてならない)」と、口かためたまふ(と堅く口止めされた)。

「さらぬ(また其の他の)法師ばらなどにも(法師たちにも)、皆(皆其々に手当てを施し)、言ひなすさま異に(事情を変えて)はべる(言っていて在ります)」

と聞こゆるにぞ(と惟光が言い継ぐと、其の秘匿の配慮に源氏は)、かかりたまへる(頼り甲斐を覚えられた)。

ほの聞く女房など(この二人の密議を立ち聞きする女房は)、「あやしく(怪しい)、何ごとならむ(何事なのだろう)、穢らひのよしのたまひて(喪中と称して)、内裏にも参りたまはず(参内も為されず)、また(其の一方で)、かくささめき(このようにひそひそと話して)嘆きたまふ(嘆いて居られる)」と、ほのぼのあやしがる(と臆に訝る)。

「さらに事なくしなせ(くれぐれも大事に手配り致せ)」と(と君は)、そのほどの(葬儀の)作法(進め方を)のたまへど(注文されたが)、

「何か(何も)、ことごとしく(大袈裟に)すべきにも(為さるには)はべらず(及びません)」

とて立つが(といて惟光が立ち戻り掛けると、源氏は)、いと(思わず)悲しく思さるれば(悲しみを覚えられて)、

「便なしと思ふべけれど(不都合では在ろうが)、今一度、かの亡骸を見ざらむが(見ないで居たのでは)、いと(とても)いぶせかるべきを(気が済まないので)、馬にて(馬で)ものせむ(行ってみよう)」

とのたまふを(と話されるので、惟光は)、いと(さすがに)怠怠しき事(たいだいしきこと、有るまじき事)とは思へど、

「さ思されむは(そう御思いならば)、いかがせむ(致し方御座いません)。はや(急いで)、おはしまして(お出掛けになり)、夜更けぬ先に(夜更け前に)帰らせおはしませ(お戻り下されませ)」

と申せば、このごろの(丁度この五条通いで)御やつれに(ぼろ姿の変装用に)まうけたまへる(作ってあった)、狩の御装束着替へなどして出でたまふ。

御心地かきくらし(悲しみのあまり)、いみじく(断じて)堪へがたければ(耐え難く)、かく(このように)あやしき(後先定まらぬままの)道に(弔いに)出で立ちても(出立するも)、危かりし(肝を冷やした)物懲りに(前夜の怪奇を省みれば)、いかにせむと(どうしたものかとの)思しわづらへど(戸惑いも在ったが)、なほ(やはり)悲しさのやる方なく(悲しみが抑えきれず)、「ただ今の(とにかく我が目で)骸を見では(亡骸を見ないでは)、また(再び)いつの世にか(来世においては)ありし容貌をも(生前の姿を)見む(見られない)」と、思し念じて(胸深く祈って)、例の大夫(惟光と)、隨身を(いつもの近衛士を)具して(従えて)出でたまふ(出発なされた)。

道遠くおぼゆ(道が遠く感じられた)。*十七日の月(たちまちのつき)さし出でて、河原のほど(鴨川の河原を渡る頃)、御前駆(みさき、先導)の火も仄かなる(ほのかなる、忍び故の弱火)に、*鳥辺野(とりべの)の方など見やりたるほどなど(見渡す山並みの黒い影の)、ものむつかしきも(妖気立つ様も)、何ともおぼえたまはず(特に気にも為されず)、かき乱る心地したまひて(悲しみに衝き動かされて)、おはし着きぬ(山寺に到着された)。*陰暦の十七夜の月は、宵の内から忽ち出て来る。*鳥辺野は東山山麓にあった火葬場。

辺りさへ(周りの寂れ方も)すごきに(異様だが)、板屋(板屋根小屋)のかたはらに(の傍らに)堂(だう、参拝所を)建てて(設けて)行へる(念仏行を勤めている)尼の住まひ(尼の家は)、いとあはれなり(物悲しかった)。御燈明(みあかし、仏前燈明)の影(かげ、火影)、ほのかに(微かに)透きて見ゆ(隙間から見えた)。その屋(や、部屋)には、女一人泣く声のみして、外の方(とのかた)に、法師ばら二、三人(ふたりみたり)物語しつつ(話し合ったり)、わざとの声立てぬ念仏ぞする(無言念仏などしたりしていた)。寺々(東山諸寺)の*初夜(しょや、宵の念仏行)も、みな行ひ果てて(みな本日分の務めを終えて)、いとしめやかなり(とても静かだった)。清水の方ぞ(清水寺の方角だけは)、光多く見え、人の気這ひも繁かりける(けはひもしげかりける、参詣人も多く居るようだ)。*仏教で、一昼夜を晨朝(じんじょう)・日中(にっちゅう)・日没(にちもつ)・初夜(しょや)・中夜(ちゅうや)・後夜(ごや)の六つに分けたものを六時(ろくじ)といい、その時刻ごとに念仏や読経などの勤行(ごんぎょう)をした。初夜は戌(いぬ)の刻。現在の午後8時ごろ。宵の口。

この(ここでは)尼君の子なる大徳(だいとこ、高僧)の声尊くて、経うち読みたるに(経を読み上げていたので)、涙の残りなく思さる(源氏は涙を止め処無く流された)。入りたまへれば(そして家の中に源氏がお入りに為って見ると)、火取り背けて(明かりを夕顔から離して)、右近は屏風隔てて臥したり(屏風で隔てた自分のほうに引き寄せて右近が横に為っていた)。いかにわびしからむと(暗がりに寝かされた夕顔に、其の死を実感すれば、源氏は如何にも無常な様と)、見たまふ(御覧になった)。恐ろしきけもおぼえず(亡骸では在ったが夕顔は気味悪い顔付きではなしに)、いとらうたげなるさまして(とても愛らしいまでの姿で)、まだいささか変りたるところなし(まだ少しも変わりなく生きていたかのようだ)。手をとらへて、

「我に、今一度、声をだに(声だけでも)聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけむ(どういう因果があったというのか)、しばしのほどに(僅かな間ではあったが)、心を尽くしてあはれに思ほえしを(心の限り慈しんでいたものを)、うち捨てて(残したままで先立ち)、惑はしたまふが(途方に暮れさせ為さるとは)、いみじきこと(何と惨い事か)」

と、声も惜しまず、泣きたまふこと、限りなし。

大徳たちも、誰とは知らぬに(源氏の素性は知らなかったが)、あやしと(只ならぬ縁者と)思ひて、皆、涙落としけり。

右近を、「いざ、二条へ」とのたまへど、

「年ごろ(長いこと)、幼くはべりしより、片時(寸暇も)たち離れ(離れたり致し)奉らず、馴れ聞こえ(なれきこえ、慣れた方と申し上げて=親しくさせて頂いて)つる人に(来た人に)、にはかに別れたてまつりて(急にお別れ申し上げて)、いづこにか帰りはべらむ(何処に帰る所が御座いましょう)。いかになりたまひにきとか(如何なる事の次第であったものか)、人にも言ひはべらむ(人に知らせることも出来ません)。悲しきことをばさるものにて(悲しみも然る事ながら)、人に言ひ騒がればべらむが(人に言い咎められるのが)、いみじきこと(辛いのです)」と言ひて、泣き惑ひて(泣き崩れて)、「煙に類ひて(けぶりにたぐひて、一緒に焼かれて)、慕ひ参りなむ(後を追って付き従いたい)」と言ふ。

「道理(ことわり、其れは正しい訓え)なれど(だろうが)、さなむ(これが)世の中はある(世の習いだ)。別れと言ふもの、悲しからぬはなし。とあるもかかるも(此岸に居るのも彼岸に居るのも)、同じ命の限りあるものになむある(定めなれば同じことだ)。思ひ慰めて(気を取り直して)、我を頼め(私の言う通りに従ってくれ)」と、のたまひ(と仰せになり)*こしらへて(手当てを与えて宥めて、落ち着かせて)、「かく言ふ我が身こそは、生き留まる(いきとまる、生き続け)まじき(られない)心地すれ(気がする)」 *「拵えて」は「形を整えて」だから、所在無くした右近を面倒見るからと言って落ち着かせたのだろうが、路頭に迷っている人を納得させるためには実際に「用意を整えて」見せる必要はあっただろう。といっても、この場面で直接に右近を二条院に連れ帰るのは物理的にも秘密保持の面からも不可能である。此处での実際の源氏の手当てとしては、右近に因果を含めて落ち着かせた上で、近い内に惟光を迎えに遣すので其れまで此处で待つようにと、当座の用立てを右近本人のみならず尼君や大徳や他の法師たちにも施したという所だろうか。

とのたまふも(とお話に為るのは)、頼もしげなしや(頼りなさそうだった)。

惟光、「夜は(よは、夜はもう)、明け方になりはべりぬらむ(明け方になってしまいます)。はや帰らせたまひなむ(早くお帰り下さい)」

と聞こゆれば(と申し上げれば)、振り返のみせられて(源氏は幾度も振り返りながら)、胸もつと塞がりて出でたまふ(暗然として家を出られた)。

道いと露けきに(帰り道は随分湿気て)、いとどしき朝霧に(濡れるほど深い朝霧で)、いづこともなく惑ふ(どこか幻想的な)心地したまふ(雰囲気だった)。ありしながら(生前と同じように)うち臥したりつるさま(横たわっていた夕顔の姿)、うち交はしたまへりしが(情を交わした名残にと交換したもので)、我が御紅の御衣の(わがくれなるのおんぞの、自分の赤衣を)着られたりつるなど(掛けてあった様子を偲べば)、いかなりけむ契りにかと(自分と夕顔の不思議な因縁に)道すがら思さる(道々感慨深く思われた)。御馬にも、はかばかしく(しっかりと)乗りたまふまじ

き(お乗りになれない)御さまなれば(御様子なので)、また、惟光添ひ助けておはしまさするに、堤のほどにて(鴨川の堤で)、御馬よりすべり下りて(落馬なされて)、いみじく御心地惑ひければ(ひどく心取り乱されたので)、

「かかる道の空にて(こんな道端で)、放れぬ(はふれぬ、野垂れ死ぬ)べきにや(でしまう)あらむ(のだろうか)。さらに(もはや)、え(とても)行き着くまじき(帰り着けそうも無い)心地なむする(気がする)」

とのたまふに(と話されたが)、惟光心地惑ひて(惟光も戸惑って)、「我がはかばかしくは(自分がしっかりしていたら)、さのたまふとも(君が見送りたいと仰っても)、かかる道に(このような御出掛けに)率て出でたてまつるべきかは(御連れ申すべきではなかった)」と思ふに(と思えば)、いと(とても)心あわたたしければ(心穏やかではなくなって)、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じ奉り(ねんじたてまつり、救済を願って祈り)ても、すべなく思ひ惑ふ(今更の事と途方に暮れた)。

君も、しひて(どうにか)御心を起こして(気を取り直して)、心のうちに仏を念じたまひて、また、とかく(何かと)助けられたまひてなむ(惟光に助けられながら)、二条院へ帰りたまひける。

あやしう(この怪しい)夜深き御歩きを(夜通しの御出掛けを)、人びと(女房たちは)、「見苦しきわざかな(感心できません)。このごろ、例よりも(普段よりも)静心なき(落ち着きの無い)御忍び歩きの(御出掛けが)、しきるなかにも(多い中でも殊に)、昨日の御気色の、いと(とても)悩ましよう(気分が悪そうに)思したりしに(思えましたが)。いかでかく(なぜこのように)、辿り歩き(たどりありき、迷い歩き)たまふらむ(なさいますやら)」と、嘆きあへり(と嘆き合った)。

まことに(そして源氏は本当に)、臥したまひぬるままに(臥せってしまったままで)、いといたく(それはとても)苦しがりたまひて(お苦しみになって)、二、三日(ふつかみか)になりぬるに(と過ぎたので)、むげに(すっかり)弱るやうに(衰弱の御様子に)したまふ(成られた)。内裏にも(帝に於かれましても)、聞こしめし(源氏の容態を御知りになつて)、嘆くこと限りなし。御祈り(御祈禱を)、方々に隙なく罵る(ののしる、厳命される)。祭(まつり、願掛け)、祓(はらへ、厄払い)、修法(ずほふ、慈悲願い)など、言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなく(源氏は他に類を見ないほど)ゆゆしき(靈験ある)御ありさまなれば(美しさだったので)、世に長くおはしますまじきにやと(この衰弱ぶりは愈々以って薄命の標しではないかと)、天の下の人の騒ぎなり(宮処中の噂になった)。

苦しき御心地にも(気分が優れないながらも)、かの右近を召し寄せて、局(つぼね、部屋)など近く給ひて(たまひて、お与えになつて)、さぶらはせたまふ(側仕えさせ為された)。惟光、心地も騒ぎ惑へど(源氏の容態に気を病んだが)、思ひ閑めて(おもひのどめて、右近御召の遣いに立ってみれば心広くして)、この人の(右近が)手付き無し(たづきなし、身寄り無く不安)と思ひたるを(思っているのを)、もてなし(世話して)助けつつ侍はず(さぶらはす、お仕えさせた)。

君は、いささか隙ありて(ひまありて、気分良く)思さる時は(お思いになつた時は、右近を)、召し出でて使ひなどすれば、ほどなく(やがて右近も)交じらひつきたり(御邸暮らしに馴染んだ)。

服(ぶく、喪服の)、いと黒くして(濃い色を着た右近は)、容貌などよからねど(顔立ちはよくなかったが)、かたはに見苦しからぬ(特には難の無い)若人なり(若い女房だった)。

「あやしう(数奇で)短かかりける(短かった)御契りに(夕顔との縁に)ひかされて(引き込まれて)、我も世に得(え、もう)あるまじき(いられない)なめり(ようだ)。年ごろの頼み失ひて(長年の主人を失って)、心細く思ふらむ(心細く思っているであろう其処許の)慰めにも、もし永らへば、よろづに育まむとこそ(色々面倒を見ようとは)思ひしか(思っていたが)、ほどなく(間もなく)また(我もまた夕顔の)たち添ひぬ(後を追う)べきが(であろうことが)、口惜しくもあるべきかな(残念な事だ)」

と(と源氏が)、忍びやかにのたまひて(そっと話されて)、弱げに泣きたまへば(弱々しくお泣きになると、右近は)、言ふかひなきことをばおきて(言っても仕方の無い事ではあっても)、「いみじく惜し(本当に無念なこと)」と思ひきこゆ(と存じ上げた)。

殿の内の人(とののうちの一と、二条院の女房家人はみな)、足を空にて(地に足が着かぬ)思ひ惑ふ(思いで狼狽していた)。内裏より、御使(おんつかひ、お見舞いの使者)、雨の脚よりも異に繁し(けにしげし、一層頻繁だった)。思し嘆きおはしますを(帝の御心痛を)聞きたまふに(お聞きに為った源氏は)、いと(まことに)かたじけなくて、せめて(精一杯)強く思しなる(渾身の力を振り絞り為された)。大殿も(養父も)経営(けいめい、奔走)したまひて、大臣(おとど、左大臣自ら)、日々に渡りたまひつつ(毎日二条院へお越しになって)、さまさまのことを(あらゆる加持祈祷を)せさせたまふ(上げさせ為される)、しるしにや(その顕れにか)、二十余日(にじふよにち)、いと重く(ずいぶん重く)わづらひたまひつれど(思われていたが)、ことなる名残のこらず(特に後も引かず)、怠る様に(おこたるさま、快癒した様子に)見えたまふ(見受けられた)。

穢らひ(行き触れと公言した夕顔の死穢で)忌みたまひしも(喪中謹慎なされていた事も)、一つに満ちぬる(ちょうど此の日で忌中明けとなる日数で名実共に一つに満ちた)夜なれば(夜だったので)、おぼつかながらせたまふ(御心配頂いている)御心(帝のお気持ち)が、わりなくて(源氏は何とも申し訳なくて)、内裏の御宿直所に参りたまひなどす(後宮淑景舎まで参られたりして見られた。そして退出られる時には)。大殿(養父の左大臣が)、我が御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌(おんものいみ、病後謹慎について)なにやと(あれこれと)、むつかしう慎ませたまつりたまふ(作法や心構えなどを煩くお示し申し上げた)。我にもあらず(源氏は奇妙に)、あらぬ世によみがへりたるやうに(別世界にでも甦ったかのように)、しばしはおぼえたまふ(暫し呆然とされた)。

[第七段 忌み明ける]

九月(ながつき)二十日(はつか)のほどにぞ、怠り果て給ひて(おこたりはてたまひて、病全快成されて)、いといたく面瘦せたまへれど、なかなか、いみじく(いっそう)なまめかしくて(優美で)、眺め勝ちに(ながめがちに、物思いに耽る風で)、音をのみ(ねをのみ、声をとえば)泣きたまふ(泣いてばかりでいらした)。見たてまつり(その御姿を見て)とがむる人もありて(訝しむ女房も居て)、「*御物の怪なめり(物の怪に取り憑かれて御出でなのでは)」など言ふもあり(などと言う者も居た)。 *夕顔が八月十五日に急死して、十七日の葬送から帰ったまま臥せって、三十日喪に服し

て、ほぼ忌明けと同時に気力回復も見たが、未だ狐憑きが落ちていない、ように見えるのも無理は無かった。夕顔こと常夏の素性が未だ確認できていないので、実体は既に失われたものの意味は浮遊したままで、源氏にとっても之の恋の決着の付け様が無かったからである。だから、其れが以下で語られる。

右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に、物語などしたまひて(お話をなさる事があって)、

「なほ(やはり)、いとなむ(どうしても)あやしき(分からない)。などて(何故に彼の君は)その人と知られじとは(素性を知られまいと)、*隠いたまへりしぞ(隠し通されたのだろうか)。まことに(本当に)海人の子なりとも(下賤の身であっても)、さばかりに(私があれば)思ふを(思っていたのを)知らで(知らずに)、隔てたまひし(打ち明け下されず)かば(ばかりだった)なむ(と言うのは)、つらかりし(辛い事でした)」とのたまへば(と話されると、右近は)、*源氏がこういう言い方をしたい気持ちは分かる。夕顔が事情を隠したかったから、こうして互いに身分を知らないまま今に至った、という事にしたいのだろう。しかし実際には源氏は惟光に夕顔の素姓を探らせて、ほぼ確実な見当を付けていた。知った事情からは道義上、夕顔を自分の女に為し難かった源氏は、敢えて其の情報を隠したのである。一方的に源氏の意図であった。夕顔は或る筋からは身を隠してはいたが、情夫に事情を隠す意図など無かった事は、直ぐ右近に指摘される。

「などてか(どうしてそんな)、深く隠し(何時までも隠し)きこえたまふことは(申す事は)はべらむ(御座いません)。いつのほどにてかは(ただ何時の折に)、何ならぬ(何程の身分でもない者の)御名のりを(名乗り上げを)聞こえたまはむ(申し上げる事が出来ましたでしょうか)。初めより(初めから)、あやしうおぼえぬさまなりし(あやふやな形だった)御ことなれば(睦事でしたので、女君は)、『現ともおぼえずなむある(本気とは思えません)』とのたまひて(と仰っては居ましたが、殿の身分は窺い知れて居りましたので)、『御名隠しも(殿の御名隠しを)、さばかりにこそは(貴人の遊び事だからなのでしょう)』と聞こえたまひながら(と存じ上げながら)、『なほざりにこそ(その場限りの事として)紛らはしたまふらめ(誤魔化して居られるのだろうか)』となむ(というように受け取って)、憂きことに(物寂しく)思したりし(思っ御出ででした)」と聞こゆれば(と申し上げれば)、

「合い無かり去る(あいなかりける、無意味な)心比べ(意地の張り合い)どもかな(同士だったものだ)。我は、しか(そのように)隔つる(あえて隠す)心もなかりき(心算は無かった)。ただ、かやうに(ああした)人に許されぬ(人目憚る)振る舞ひをなむ(恋の逢瀬というものに)、まだ慣らはぬことなる(まだ慣れていなかったもので)。*内裏に諫めのたまはする(上が御注意下される事)をはじめ、つつむこと多かる身にて(憚り多い身の上で)、はかなく(何気なく)人にたはぶれごとを言ふも(人に軽口を言うにも)、所狭う(ところせう、窮屈で)、取りなしうるさき(反響が大きい)身のありさまになむあるを(立場なので)、はかなかりし(道すがらに符と見初めた)夕べより、あやしう心にかかりて(妙に心に掛かって)、あながちに(無理算段して)見たてまつりしも(お会いしてきたのも)、かかるべき契りこそは(このような数奇な縁だからこそ)ものしたまひけめと思ふも(結ばれたのかと思うと)、あはれになむ(労しい)。またうち返し(また其の反面)、つらうおぼゆる(恨めしくも思う)。かう(こうも)長かるまじきにては(長い付き合いに成れなかったのに)、など(なぜ)、さしも心に染みて(あのように心に深く)、あはれとおぼえたまひけむ(愛しくお慕い申したのだろうか)。なほ詳しく語れ(今からでも女君の素性を詳しく話してくれ)。今

は(今さらは)、何ごとを隠すべきぞ(何を隠そうとすることも無いだろう)。七日七日に(なぬかなぬかに、七日毎の追善供養に)仏描かせても(絵師に仏像画を画かせるにつけても)、誰が為とか(誰の為と名を唱えて)、心のうちにも思はむ(口には出来ずとも、せめて心の内には念じたいものと思う)」とのたまへば(と源氏が話されたので)、*右近の指摘に苦しい言い訳の源氏である。遂には帝まで持ち出して反論を防ぎながら、自分の窮屈な立場を説明した。しかし雲上の源氏に外形上の窮屈さなど無い、あるのは自分の思惑を取り巻く事情の窮屈さだけである。いや、もしかすると其れだけに其の窮屈さの手応えを求めて、窮屈な心理状況を敢えて作ろうとした、のかもしれない。とにかく源氏は自分からは手の内を晒せない立場に居た。だから、更に右近に問う。

「何か(決して)、隔てきこえさせ(隠し隔てなど)はべらむ(致しません)。自ら(女君が自ら)、忍び過ぎしたまひしことを(隠し通された事を)、亡き御うしろに(亡き後で勝手にお話しては)、口さがなく(慎み無い口の軽さ)やは(ではないか)、と思うたまふばかりになむ(と存じて居りましただけで御座います)。

親たちは(女君の御両親は)、はや(早くに)亡せたまひにき(亡くなっております)。三位中将(さんみちゅうじょう)となむ(なる)聞こえし(お家柄でした)。いと(御尊父は女君を大変に)らうたきものに思ひ(お可愛がりになって)きこえたまへりしかど(御出ででしたが)、我が身のほどの(御自身の)心もとなさを(不遇を)思すめりしに(お嘆きの内に)、命さへ(御寿命まで)堪へたまはず(心ならず早世なされ)なりにしのち(ました後に)、はかなきものの(ほんのわずかの)たよりにて(御縁で)、頭中将なむ(頭中将で御座います、あの御殿が)、まだ少将にもものしたまひし時(まだ少将でいらした時に)、見初めたてまつらせたまひて(女君をお気に入り為されました)、三年(みとせ)ばかりは、志あるさまに(愛情深く)通ひたまひしを(お通い下されていましたが)、去年(こぞ)の秋ごろ、かの右の大殿より(舅親の右大臣家筋から)、いと恐ろしきことの(とても恐ろしい話を)聞こえ参で来しに(きこへまでこしに、申し入れてまいりましたので)、物怖ぢを(怖がり)をわりなくしたまひし(無闇になされる)御心に(御気性に)、せむかたなく(途方も無く)思し怖ぢて(怖気づかれて)、西の京に(朱雀大路の西側右京の)、御乳母住みはべる所になむ(乳母が住まう家に)、はひ隠れたまへりし(逃げてお隠れになりました)。

それもいと見苦しきに(しかし其処も大変手狭でしたので)、住みわびたまひて(済み難く為されて)、山里に移ろひなむと(山里に移ろうと)思したりしを(お思いだったところ)、今年よりは(今年から目当ての里家が)塞がりける方に(ふたがりけるかたに、悪い方角と)はべりければ(なっていましたので)、違ふとて(たがふとて、方違いの為に)、あやしき所に(あの五条の賤しい家に)ものしたまひしを(隠れ住んでおりましたものを)、*見顕され(みあらはされ、見つけ出されて)たてまつりぬること(しまわれた事と)、思し嘆くめりし(お嘆きのようでした)。世の人に似ず(普通以上に)、ものづつみを(隠し立てを)したまひて(仕為されて)人に(人から)物思ふ気色を(物思いの姿を)見えむを(見られるのを)、恥づかしきものにしたまひて(恥づかしがられて)、つれなくのみ(素気無いばかりに)もてなして(身構えて)、御覧ぜられ(御目にかかり)たてまつり(申し上げて)たまふ(いらした)めりしか(ようでした)」 *ここの「見顕され」が良く分からなかった。誰に見つけられたというのか。今までの話の経緯からすれば、女が<見つけられた>と思うのは、あの源氏が頭中将に間違われて歌を贈られた時しかない。つまり<見つけた>のは頭中将だ。少なくとも常夏はそう思った、ということだろう。何故そう思ったのか。そもそも常夏は右大臣家と其の四の姫筋から逃げた。そして頭中将の前か

らも姿を消したので、四の姫の婿殿たる中将の女通いも止まった。となれば今や、右大臣家にしてみれば終わった話にも見える。いや、となると常夏にしてみれば、頭中将こそが其の筋の者に思っていた、ということになる。常夏の話は頭の君から語られたので、彼の話をも呑み込んできた嫌いがある。もう一度、常夏の立場で<右大臣家の嫌がらせ>を見直してみよう。頭の君の言葉によると其れは「なさけなくうたてあること(情けなく打建て在る事―抵抗し難い悲しい事)」と語られていて、私は其れを<脅迫>だろうと思いついて、つまり頭君一人だけは、常夏側に立っている筈だと、先入していた。しかし昨今の若い女たちのシングルマザー指向を見て、符と思った。四の姫は常夏に撫子の御邸への引取りを持ち掛けたのではなかったのか、と。其れを聞いた常夏は、其れならいっそ男は要らない、撫子だけを手許に置きたい、と思ったのではないか。頭君の立場や右大臣家の権勢からして、斯かる常夏の正当性が得難く見えていた事もあるが、母性は男の私には思い及ばない所に在るのかも知れない。そう思い直して頭の君の常夏語りを読み返すと、頭の世話を常夏が進んで受けようとしなかった事も腑に落ちた。何だ、そうだったのか。常夏は頭の君からこそ、隠れたのだ。となると、源氏一行が夕顔を眺めていた事の意味は常夏にとって、既に頭君に居場所を突き止められて、いよいよ頭本人が様子を見に遣って来た、ように見えていた事になる。大変だ、歌の意味が違ってくる。歌は「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(和歌 4-1)とあって、以前は其れを「心当たりが在る筈の白露(=撫子)を助けた夕顔(=日陰)の私」と読んでいた。常夏の立場を、四の姫からは逃げたが頭の君には頼りたい、ものと考えて、歌意を「私は此処に居ます、撫子を思うなら訪ねて下さい」と解していた。とんでもない。「心当てにそれかとぞ見る」は文字通り<探し当てられてしまいました>。「白露の光添えたる」は<白露の=撫子は><光添えたる=無事に育っています>。「夕顔の花」は<日陰暮らしで>、と読む。だから歌意は「どうか此の俣そつと見逃して置いて下さい」となる。となると、人違いだったとはいえ源氏はそれなりに返歌していたが、彼の返歌は常夏には如何見えていたのだろうか。返歌は「寄りてこそ其れかとも見めたそかれに仄ぼの見つる花の夕顔」(和歌 4-2)だが、此れが頭の君の歌だとして読んで見る。すると何と「誰そ彼かとも見極めようと寄ってみました、今はもう二人の暮らしを遠い花として見守る事にします」と読めてしまう。そうか、だからこの歌を隨身が届けた時の家の様子を作者はわざわざ描写していたのか。家の女たちはこの返事が「わざとめかしければあまえて」いた。常夏は頭の返事を気が気で無しに待っていたが、なかなか返事は無かった。頭もよくよく考えた末にくわざとめかし=わざわざ意向を知らせて来たが、その内容が常夏の意に沿ったものだったので<あまえて=安堵して>、場が和んだのである。其れを隨身は分を弁えぬ見苦しさと感じて退席したが、常夏にしてみれば其の隨身の踵の返し方に頭の思い切りを感じて、更に安堵したのだろう。であったならば、常夏は源氏の返事を頭君の返事と思い続けていたのかもしれない。あの物の怪の屋敷で源氏が人違いを暴露した時に、常夏は本当に驚いたのかもしれない。だとすると其の時、頭君の追跡が終わっていない事に常夏は気付いた。だから、いっそ源氏にしがみ付いた。源氏にしてみれば、いっそ甘える夕顔が可愛かったのかもしれないが、常夏には怯えが再来していた。いや、もしかすると其の恐怖が昂じたショック死、と言う見方さえ成立しかねない。源氏はマツタリ気分で居たから、自責は微塵も感じなかったかもしれないが、作者は源氏の存在自体の罪深さを重ねに重ねて説いているのだろうか。夕顔が常夏だと明示されない内は、こうした描写を無理やり源氏の立場で読み下していたが、作者の意図が掴みきれない違和感は何となく在った。今、為時女がクスッと笑ったな。作者のこうした言葉の曖昧さを遊ぶ習性は、意図ではなく生活感なのだろう。ん？、また笑ったか。いいでしょう、わかりました。問題は源氏が何処まで常夏の立場を理解していたのか、という事ですよ。でも源氏は、常夏が頭を避けていた事に同情した訳でもなく、まして其の二人の隙を突こうとした訳でもなく、源氏自身の興味で常夏をと言うより、常夏であろう夕顔を抱きたかった訳で、其の点でのブレは無く、意地汚いが小賢しくは無かった、という事で良いんじゃないかな。意地汚さは小賢しさの芽になるだろうけど、此処は作為の失敗ではない。見直すとすれば常夏の人と形りの方だが此方にして、物言わぬ女性性格も母性に於いては主張する、女は弱しされど母は強し、という事かと思う。頭が納得して追跡を終結させた、と思つて何とか一息吐いた所に、得体は知れないが高貴な香りを漂わせた若い男が現れた。若い母親

が男を頼りたくて次第に身も心も委ねて行く。可愛くて良いんじゃないかな。少なくとも、物の怪に気を抜かれる因果は見当たらない。其れが、思い込みの激しさからか、抜かれた。何たる不条理。しかしこの世の中、生死往来は不条理の結果だ。其れを条理に揃えて行くのが人の道、と言う観念を作者が主張しているのか如何かも未だ分からないが、この辺りまで見て置けば今の所は間に合いそうだ。また頭の君については、彼自身は夕顔の件に関しては居ないので見直しようも無い。

と、語り出づるに(右近が夕顔の素性を語り明かし出したので、源氏は)、「さればよ(そうか、やはり、そうだったか)」と(と従前の推量との符号に)、*思しあはせて(合点為されて)、いよいよ(ますます)あはれまさりぬ(感慨を深くされた)。*是で基本的な事情は確認できた。源氏は、夕顔はそういう女だったと自分なりに整理できた。一先ずは狐憑きも落ちる事だろう。実は、社会人として筋を通さなければいけない源氏にとって、夕顔が死んだ事は済し崩しの危うさに終止符が打たれた、という源氏本人は物足りなくとも客観的には安定した状態に落ち着いたのであって、文字通り狐憑きが落ちていた事になる。ただ、母としての常夏の意味は源氏に残っているので、此れはかなり暗示的な語り口だ。また頭中将にとっては、女としての常夏も未だ生きている。だから、次にある子供の件は如何推移しようと、また別の話である。

「幼き人(幼子が)惑はしたりと(行方知れずと)、中将の愁へしは(中将が憂いて居たが)、さる人や(そうした子は、いたのか)」と問ひたまふ。

「しか(はい、そうです)。一昨年(をととし)の春ぞ、ものし(儲け)たまへりし(られました)。女(をんな)にて、いとらうたげになむ(とても可愛い、お子様です)」と語る。

「さて(それで)、いづこにぞ(其の子は何処に居るのか)。人にさとは(ひとにそうとは)知らせで(知らせぬままに)、我に得させよ(私のものにさせてくれ)。あとはかなく(跡形なく)、いみじと思ふ(悔やみに思う夕顔の)御形見に、いと(とても)うれしかるべくなむ(嬉しくなりえるもの=喜ばしいこと、と思う)」とのたまふ。「かの中将にも伝ふべけれど(伝えるべきだが)、言ふかひなき(言う甲斐も無い)かこと(託言、恨み言を)負ひなむ(言われるだろう)。とぎま(自分の縁と)かうさま(他人の縁との)につけて(違いが)、育まむに(子を育てるのに)咎あるまじきを(罪となる事は無いだろうに)。そのあらむ(その今の)乳母などにも、ことさまに(異様に、別の事情を)言ひなして(言い含めて)、ものせ(整えるのが)よかし(良いだろう)」など*語らひたまふ(などと源氏が御話なされる。すると右近は、)。*此処の意味も良く分からない。いや、頭中将に子供の件を知らせたくない源氏の気持ちは分かる。ただ、右近と頭中将が面識が無いとは到底思えない。右近は二条院に住んでいる。頭中将は二条院に出入りしている。特別な配慮をしない限り二人は出会うか見掛け合う、筈だ。そして特別な配慮は他の女房たちの手前、右近一人に出来ようも無い。頭の君は常夏や撫子を探しているから、右近を見付けたら必ず問い詰める。其れが特に此方から話し出さないと、頭の君が気付かないような物の言い方は腑に落ちない。しかし私の収まりの悪さなど一瞥もされず、このまま庭の情景へと場面転換されて、夕顔の話は一段落と明示されて、余韻を残しつつ終結して行くのである。

「さらば(それは)、いと(とても)うれしくなむ(喜ばしい)はべるべき(ことと存じます)。かの西の京にて生ひ出でたまはむは(あの貧しい乳母の許で御成長なさるのは)、心苦しくなむ(お可哀相です)。はかばかしく(しっかりと)扱ふ人なしとて(お世話出来る者が五条の家に居りません

でしたので、かしこに(あちらに、預けられたのです)」など聞こゆ(などとお答えした。そして懸念の一つが晴れたかと安堵して、符と庭に目を遣る)。

夕暮の静かなるに、空の気色いとあはれに、御前の前裁枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉(もみじ)のやうやう色づくほど、絵に描きたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかに(これは思いの外に)をかしき(恵まれた)交じらひ(宮仕え)かなと(かと考えて)、かの夕顔の宿りを(五条の貧家暮らしをしていた身分を)思ひ出づるも(思い出せば)恥づかし(気が引けた)。

竹の中に(竹藪で)家鳩(いへばと、ドバト)といふ鳥の(鳥が不と)、ふつつかに鳴くを(野太く鳴くの)を)聞きたまひて(源氏はお聞きに為って)、かのありし院に(あの先日の院で)この鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの(ひどく怖がっていた夕顔の様子が)、面影に(臉に)らうたく(可愛いらしく)思し出でらるれば(浮かんで来たので)、

「年はいくつにか物し給ひし(ものしたまひし、お成りだったのか)。あやしく世の人に似ず(何か普通と違って)、あえかに見えたまひしも(か弱そうにお見受けしたが)、かく(こうも)長かるまじくて(永らえられずに)なりけり(なったとは)」とのたまふ。

「十九にや(じふくにや、十九歳にかは)なりたまひけむ(お成りだったでしょう)。右近は(わたくし右近は)、亡くなりける御乳母の(女君の御乳母が亡くなって)捨て置きてはべりければ(遣した子で御座いますが)、三位の君の(御尊父が)労たがり給ひて(らうたがりたまひて、可愛がって下さいまして)、かの御あたり去らず(女君の御側を離れずに)、生ほしたてたまひしを(大きくさせて頂きました事を)思ひたまへ出づれば(思い出しますと)、いかでか(どうして)世にはべらむず(生き永らえて居られ)らむ(ましようか)。いとしも人にと(女君への愛しさが)、悔しくなむ(悔しいほどです)。ものはかなげにものしたまひし(物果敢なげにしていらした)人の御心を(女君のお気持ち)、頼もしき人にて(頼みの方として)、年ごろならひ(長年ずっと)はべりけること(お仕えしてまいりました)」と聞こゆ。

「はかなびたるこそは(か弱そうにしている人こそ)、らうたけれ(可愛いものだ)。かしこく(利口ぶって)人になびかぬ(人に従わないのは)、いと(全く)心づきなき(興醒めの)わざなり(遣り方だ)。自ら(自分自身が)涉々しく健よか為らぬ(はかばかしくすくよかならぬ、目聡く始末する事など出来ない)心ならひに(性格なので)、女はただやはらかに、とりはづして(取り違えなどして)人に欺かれぬべきが(人に騙されそうなくらいの人で)、さすがに(そうであっても)ものづつみし(慎ましく)、見む人の(夫の)心には従はむなむ(気持ちに従順で)、あはれにて(品があり)、我が心のままに(私の好みで)取り直して(とりなほして、装わせて)見むに(連れ添うのが)、なつかしく(望ましいもの)とおぼゆべき(思うところだ)」などのたまへば、

「この方のお仕えした女君が御好みには(殿のお好みと)、もて離れたまはざりけり(寸分違わなかった)、と思ひたまふるにも(と存じ上げれば)、口惜しくはべるわざかな(一層残念な事で御座いました)」とて泣く。

空のうち曇りて(空が曇り始めて)、風冷やかなるに(風も冷たくなってきた庭を)、いと(だいぶ)いたく(長く)眺めたまひて(眺めていらした源氏は)、

「見し人の煙を雲と眺むれば、夕べの空もむつまじきかな」(和歌 4-11)

「焼き場の煙似棚引く雲は、雨模様さえ懐かしい」(意識 4-11)

*「見る」は今日でも広範な意味を持つ言葉だが、これは日本語の「見る」という言葉の特性と言うよりも、人間が目て物を「見る」ことで多くを認識するという、生理工学上の特性に基くのかも知れない。つまりは概念形成にも及ぶので、直接に目で「見る」ことを離れても「世話を見る」とも言うし、「見る」だけで「世話する」という意味になる。しかし今日では「見初める」は「恋心を抱く」ことだが、「初め」を外した「見る」を「連れ添う」とか「情交する」という意味には使わない。「情交する」意味なら「目交う」がまだ生きているが、「連れ添う」となると「見交わす」でも「合図しあう」くらいで、「性交する」には「愛し合う」や「抱き合う」、「付き合う」は「付き合う」だ。それを古語では「付き合う」「性交する」が「見る」で表現される。古語の「馴れる」「契る」にも其の意味があるが、「見る」が最も直接の行為を意味する。そう思えば「見し人」に一層の情感が増す。従って之の歌の情景は、「空に出て来た雨雲が、情交した人を送った火葬の煙に似ている。そう思ってみていると、夕暮れを暗くする黒い雲も忌わしいものでもない」、となる。

と独りごちたまへど(と独り言のように詠まれたが、右近は)、え(とても)さし(そのようには)答へも(いらへも、返歌など)聞こえず(申し上げられない)。かやうにて(このような時に自分などではなく女君が)、おはせましかば(いらしたなら殿に御返歌も差し上げたろうに)、と思ふにも(と思えば)、胸塞がりておぼゆ(胸が詰まる気がした)。(源氏は徒然に夕顔を偲んで、)耳かしかましかりし(耳に煩かった五条辺りの)砧の音を、思し出づるさへ(思い出されては)恋しくて、*「正に長き夜」とうち(と空で)誦じて(ずじて、朗詠して)、臥したまへり(御休みに為られた)。
*原文注釈に、「『白氏文集』卷十九の「八月九月正に長き夜 千声万声了む時なし」(聞夜砧)の詩句」、とある。「聞夜砧(夜なべの砧の声を聞く)」という歌の意味は、「誰かの家で妻が砧を打つ音がする。月が冴えて風が冷たい秋の葉月長月の夜は本当に長い。妻は遠征で留守している夫の冬服の為に衣を打って千回万回と止むことがない。砧の一打ちで糸が一本白くなるなら、朝までに私の頭は真っ白になりそうだ。」、という秋の惜寂感に人情をたっぷり詠み込んだものらしい。